

## プロコピオス『秘史』——翻訳と註(2)

橋川裕之・村田光司

### XI章

そしてユスティニアヌスは帝位を継承するやいなや、すべてをかき乱すことに成功した。というのは彼は、以前は法で禁じられていた事柄を国家に導入しつつ、現にあった物事と慣わしであった物事をことごとく取り壊したからである。あたかも彼はすべてを異なる姿に変えようとして帝権の身なりをしたかのようにであった。[2] 実際、彼は既存の要職を廃止する一方、過去になかった要職を諸問題に対して設置していた<sup>(22)</sup>。そして諸法と兵士の入隊についても同じことをなしていたが、それは彼が正義に屈したためでも、そうすることの利益を考慮したためでもなく、すべてがより新しくなると同時に彼の名にちなむためであった。また何かを即座に変更しえなかった場合、彼はそれに自分の名を付した<sup>(23)</sup>。

[3] 彼は金銭の強奪にも人々の殺害にも決して満足を感じなかったのだが、富裕な男たちの無数の住宅を奪うと別のものも求め、以前の略奪による金をすぐさま蛮族のある連中に<sup>(24)</sup>、あるいは馬鹿げた建物<sup>(25)</sup>に投じていた。[4] そして彼はおそらく何万もの人を理由もなしに滅ぼすと、即座に他のより多くの人々への陰謀をくわだて始めた。[5] 当時、ローマ人はあらゆる人々と平和な状態にあったため、彼はその殺しの欲望を思うように満たすことができず、あらゆる蛮族を相互に衝突させ、フン人の首長らを何の理由もなく呼び出し、異常な名誉心をもって彼らに大金を与え、今後の友好の誓いとしてそれをなすのだと主張していた。彼はユスティヌス帝の治世にもそれをなしたと言われた<sup>(26)</sup>。[6] そして彼らは金を与えられると、仲間の首長のある者どもを彼らの家来とともに送り、皇帝の領土を内部から荒らすように命じていたが、それは彼ら自身が、何の理知もなく平和を買おうとする者に、それを売りつけることができるからであった。[7] また彼らは

ローマ人の国家をすぐさま隷属させ始めたにもかかわらず、皇帝から金で雇われてもいた<sup>(27)</sup>。だが彼らに続き、すぐに別の連中も惨めなローマ人への襲撃をくわだて、略奪の後にその攻撃への褒美として、皇帝の気前のよさにあずかっていた。[8] こうしてまとめて言うならば、あらゆる連中がひとときも逸することなく、代わる代わるあらゆるものを導き、運んでいた。[9] というのも、それら蛮族には首長らの数多くの集団があったからであり、戦争が不条理な名誉心を端緒としてあちこちで生じ、終わりをまったく見出せずに、それ自体の上で延々と回り続けたからでもある。[10] 結果として、この時代にはいかなる地方も山も洞窟も、またローマ人の他のいかなる地も、略奪から無傷でいることはできず、多くの地域は5度以上も占領されるはめになった。[11] それらのことと、メディア人<sup>(28)</sup>、サラセン人、スクラビニ人、アンテ人<sup>(29)</sup>、そして他の蛮族のせいで生じたすべてのことは、私の以前の著作で記述されている<sup>(30)</sup>。けれどもこの著作の冒頭で述べたように、ここでは起こった事々の原因を述べることに私には必要であった<sup>(31)</sup>。

[12] また彼は平和への見返りとして、ホスローに莫大な量の金を送ったにもかかわらず、何の理知もなく独断で行動し、アラムンダロス<sup>(32)</sup>およびペルシャ人と同盟関係にあるフン人を仲間に取り込もうとしきりに腐心し、休戦破りの最大の原因となった。私はこのことを彼らについての著作の中で、あからさまではない形で<sup>(33)</sup>述べているように思う<sup>(34)</sup>。[13] だがそのとき、彼は党派と戦争に発するローマ人にとっての諸悪をあおって焚きつけたうえ、一つのこと、すなわち大地があまたの策謀によって人血で満たされ、より多くの金が強奪されることをたくらみ、さらには臣下に対する他の多くの殺しをこのような方法で計画していた。

[14] ローマ人の国家の全土に、異端と呼ばれる

慣わしの<sup>(23)</sup>、キリスト教徒の排斥された多くの<sup>ドクサ</sup>教説が存在する。それらはすなわち、モンタノス派<sup>(23)</sup>およびサッパティオス派<sup>(27)</sup>と、人々の考えを惑わしがちな他のすべての教えである。[15] 彼はその全員に対し、その古来の教えを変更するよう命じていたが、服従しない人々には多くの脅しを、とくに今後その財産を子や親族に移譲することが不可能になるとの脅しをかけた<sup>(23)</sup>。[16] ところで異端と呼ばれる人々の聖所、とりわけアリオス<sup>(23)</sup>の教えが奉じられた聖所には風評を上回る富があった。[17] というのは元老院全体も、ローマ人の国家の他のいかなる最有力集団も、財産の点でそれらの聖所に及ぶべくもなかったからである。[18] 実際、彼らには高価な石で飾られた金銀の財宝が言い表すことも数え切ることできないほどあり、無数の家々や村々もあり、大地のいたるところに広大な所領もあり、すべての人の間でその<sup>イデア</sup>形と名を有する他のあらゆる富があった。それまで皇帝となった者の誰もそれらには決して手を付けなかったからである<sup>(24)</sup>。[19] 正統の信仰の者を含め、多くの人が、彼ら自身の必要を口実としてそれらを日々の生活の糧としていた。[20] それゆえ皇帝ユスティニアヌスは手始めにそうした聖所の財産を没収し、唐突にすべての富を奪った。その結果、多くの人が以後その生活から締め出されることになった。

[21] また大勢がすぐにあちこちへ出向き、出くわす人々に父祖の教えを変更するよう強いていた<sup>(24)</sup>。[22] そうした行為は田舎の人々には神聖なるものと思われなかったため、全員がその命令をもたらす人々に立ち向かうことを決意した。[23] すると大勢が兵士らによって滅ぼされ、他の大勢は、愚かさゆえにもっとも敬虔なる行動と信じて自決した。また彼らの大半は父祖伝来の地を捨てて逃亡していたが、フリギアに居住していたモンタノス派は彼らの聖所に立てこもり、理不尽にもすぐにその神殿に火を放ち、全滅した。このことからローマ人の国家全体は殺人と逃亡に満ちあふれた。

[24] 一方、サマリア人に対しても同様の法がすぐに制定されたため、とてつもない混乱がパレスティナを襲った<sup>(24)</sup>。[25] するとわがケサリアと他のすべての都市に暮らしていた人はみな、無意味な<sup>ドグマ</sup>教義のために何がしかの厄災をこうむるのは愚かしいと感じ、彼らのもとの名をキリスト教徒のそれに取り替え、その見せかけによって、法の危険から身

をかわすことができた<sup>(24)</sup>。[26] また彼らの中でも、思慮や公正を持ちあわせた人はみな、この教えの信者となることを決して無価値とは見なかったけれども、ほとんどの人は、自発的にではなく、法に強いられる形で父祖の教義を変更したことに憤慨したため、たちまちマニ教徒や多神教徒と呼ばれる人々の仲間に加わった<sup>(24)</sup>。[27] だがすべての農民は結束し、皇帝に対して武装蜂起することを決め、サバロスの息子で、ユリアノスという名の一人の盗賊を彼らの皇帝として擁立した<sup>(24)</sup>。[28] そして彼らは兵士らと戦闘状態に入り、しばらくは持ちこたえていたが、やがて敗北を喫し、その指導者ともども殺害された。[29] その争乱では十万人が死んだと言われており、結果的に、全土の中でもひととき良質な土地から農夫がいなくなってしまう。[30] その問題はキリスト教徒の土地所有者にとっても、きわめて悪しき結果をもたらした。というのも、彼らはその土地から何も得られないにもかかわらず、相当量の年貢を皇帝に永久に納めなければならなかったからであり、加えてその仕事は情け容赦なく執行されたからである。

[31] それから彼はヘレネスと呼ばれる人々への追及を開始し、その体を痛めつけ、その金を奪っていた<sup>(24)</sup>。[32] 彼らの中には、理性的に自らの現状を打破しようとキリスト教徒の名を帯びることを決めた人々もいたが、ほどなく彼らの大半は奉獻や供犠やその他の聖ならざる行いのかどで捕えられていた。実際、キリスト教徒に対してなされた事々について、私は後の著作にて語るであろう<sup>(24)</sup>。

[34] その後、彼は法によって少年愛を禁止したのだが、その法の後の問題ではなく、過去のある時点でその病にかかった人々を取り調べ始めた<sup>(24)</sup>。[35] 彼らへの対処も無秩序に生じていたが、それは、告発者がいなくても彼らへの処罰が下されていたからであり、一人の男ないし子供の言葉が、また場合によってはその主人に対する証言を無理強いされた奴隷の言葉が、確固たる証拠とみなされたからである。[36] こうして捕えられた人々は陰部を除去されたうえ、引き回されていた。けれども当初、この悪事はすべての人ではなく、緑組の人々、巨富を築いたと思われた人々、あるいは僭主らに何か別のことで逆った人々にもたらされていた。

[37] 加えて彼らは占星術師らにも厳しく対応していた。その結果、泥棒対策として設置された部

局<sup>(249)</sup>がほかに何の理由もないのに、老人や他の有能なる人々を拷問し、その背を何度も傷つけ、ラクダに乗せて町全体を練り歩かせていたが、彼らがこうした地で星々の問題について聡明であろうとしたこと以外、彼らには何の落ち度も見出されなかった。[38] こうして大勢の人々が蛮族のもとのみならず、遠くに暮らすローマ人のもとへもひっきりなしに逃亡していたが、あらゆる地方と都市でおびただしい数のよそ者を見ることもできた。[39] というのも、あたかも彼らの故郷が敵どもに占領されたかのごとく、各々の者が身を隠すために父祖伝来の地を別の土地とやすやす交換していたからである<sup>(250)</sup>。[40] そしてビザンティオンと各々の町で、元老院議員に次いで裕福と思われた人々の富を、ユスティニアヌスとテオドラは先に述べられた方法でせしめることができた。[41] だが私は、彼らがいかにして元老院議員からすべての金を掠め取りえたかをすぐに明らかにしよう。

## XII 章

ビザンティオンにはジノン<sup>(251)</sup>という名の者がいたが、彼はかつて西方で帝位についたあのアンテミオス<sup>(252)</sup>の孫であった。彼らは凶るところあって彼をエジプト総督に任命し、送ろうとした<sup>(253)</sup>。[2] すると彼は船を貴重な財産で満たし、出航の手はずを整えた。実際、そこには数え切れないほどの量の銀と、真珠やエメラルドや他の同種の宝石で飾られた金盤があった。だが彼らは、彼にもっとも忠実であるように思われた連中の一部を説得し、財宝をそこからできるだけ早く運びだし、空っぽの船に火を放ったうえ、ジノンには船の中でひとりで炎が上がり財宝が壊滅してしまったと報告するよう指示した。[3] その後、ジノンが突然死去してしまうと、すぐさま彼ら自身が相続人として、その財産の主となった。[4] というのも彼らが遺言書のようなものを提示したからなのだが、それはあの人の手になるものではないと広く噂されていた。

[5] また彼らは同じような方法で、彼ら自身をタティアノス<sup>(254)</sup>、ディモステニス<sup>(255)</sup>、そしてイララ<sup>(256)</sup>の相続人としたのだが、この人たちは階位の点でも他の点でもローマ人の元老院における第一人者であった。彼らはある人々については、遺言書ではなく手紙を用意することでその財産を手にした<sup>(257)</sup>。[6] というのも彼らはこうして、レバノンに住んでいた

ディオニシオス<sup>(258)</sup>と、バシリオスの息子のヨアンニスの相続人となったからである。後者はすべてのエデッサ人の中でもっとも名高かったが、私が以前の著作で述べたとおり、ベリサリオスによって人質として強制的にペルシャ人に引き渡された<sup>(259)</sup>。[7] 実際、ホスローはこのヨアンニスを一向に解放せず、それにもとづいてベリサリオスから彼に渡されたところの約束をローマ人がことごとく反故にしたと非難していたが、彼をあたかも捕虜になった人のごとく戻すことを考慮し始めた。[8] たまたままだ存命だったからなのだが、この男の祖母は少なくとも2千枚の銀貨を身代金として提示し、その孫を買い戻そうとした<sup>(260)</sup>。[9] だがこの身代金がダラスに着いたとき、察知した皇帝はその契約が成立することを許さず、ローマ人の富が蛮族のもとへ運ばれてはならぬと言った<sup>(261)</sup>。[10] ほどなくヨアンニスが病にかかり人々の間から消されてしまうと、その都市を管轄する長官がとある書簡をしたためて言った。すなわち、少し前にヨアンニス<sup>(262)</sup>が友人たる彼に宛て、その財産が皇帝のものとなることを所望すると書いた、と。[11] だが彼らが自動的にその相続人となった他のすべての人の名を列挙することは、私には不可能であろう<sup>(263)</sup>。

[12] こうしていわゆるニカの乱が起こるまで、彼らは富裕層の財産を一つずつ取り上げることに重きを置いていた。だが、私が以前の著作で述べたように、それがいったん起こると、彼らは、言うなればほぼすべての元老院議員の全財産を没収し、あらゆる調度品と最良の土地を望むがままに掌握する一方、重くきわめて厳しい租税を取り立て、博愛を名目にもとの所有者らに返還した<sup>(264)</sup>。[13] その結果、彼らは取税人から圧迫され、負債からとわに流れる利息のために疲弊し、不承不承死に抗いつつ生き延びた<sup>(265)</sup>。[14] それゆえ私と我々の多くにとって、彼らはまったく人間であるようには思われず、むしろ残忍な神霊<sup>ダイモーン</sup>のたぐいであり<sup>(266)</sup>、詩人たちが「人々に厄災をなす二人」<sup>(267)</sup>と行うように、彼らは結託して人間のあらゆる種族と行いを、いともたやすく、いとも素早く破壊しようと目論み、人間の姿を装いながら人間神霊となり、そのやり方で全世界を揺さぶった<sup>(268)</sup>。[15] 人はそうしたことを、その力でなされたことや他の多くのことから実証しうるであろう。というのも、神霊的なものは人間的なものから、多くの相違によって見分けられるから。[16] 実際、

あらゆる時代を通して大勢の人が、運命あるいは自然に恐れおののき、ある者どもは諸都市を、またある者どもは諸地域や別の同種のものを自ら打ち壊した。けれどもこの人たち<sup>(26)</sup>のほかには誰も、あらゆる人間の破滅と世界のあらゆる大地の不幸をなしえなかった。運命もまた彼らの計画を支持し、人々の破滅に寄与した。[17] というのも私が後に述べるように、この時代には地震、疫病、そして河川の氾濫により、大半のものが滅んでしまったからである<sup>(26)</sup>。こうして彼らは人間的な力ではなく、別の力によって厄災をなしていたのである。

[18] さて人々の話では、彼の母親はその身近の誰かに、彼は彼女の夫のサッパティオスの子でも、人間の誰かでもないと言ったという。[19] すなわち、彼女がまさに彼を身ごもろうとしたとき、目に見えない神霊的なものが彼女を訪れ、彼女のそばに来るとあたかも夫のごとく妻と交わったという感覚を残し、そして夢の中で消えた、というのである<sup>(27)</sup>。

[20] また夜遅くまで彼のそばにいた、すなわち宮殿で主君と会話していたある人々は、純な魂をしていたのだが、彼の代わりに、奇怪な神霊のようなものを目撃したように感じた<sup>(27)</sup>。[21] すなわちある人の語ったところでは、彼は不意に玉座から立ち上がり辺りを歩きだした。長く座るのは彼の習慣では決してなかったからである。すると突如、ユスティニアヌスの頭部が消滅し、彼の体の他の部分がうろうろし続けているように思えたため<sup>(27)</sup>、彼はその光景について、自分の目がちっとも健全ではないかのように感じて悲しみ、途方に暮れて立ち尽くしていた。[22] だが後に頭が体に戻ってきたため、彼はそれまでなかった部分が思いがけず満たされたものと思った<sup>(27)</sup>。[23] また別の人が述べたところでは、座る彼のそばに立っていると、彼の顔が何の前触れもなく形のない肉のようなものになるのを見たという。すなわち、眉毛も両目もそれらのあるべき位置にはなく、他のいかなる特徴も存在しなかったのである。がやがて彼は、彼の顔の形がもとに戻るのを見た。これらは私自身が見たのではなく、当時見ることができた人たちから聞いたうえで書いている<sup>(27)</sup>。

[24] また人々が言うには、神とたいそう親しいとある修道士が、荒れ地で彼とともに暮らす人々から説得され、彼らの一番近いところに暮らしながら

耐え難いほどの暴力と不正をこうむる人々を救うため、ビザンティオンに送られたが、そこに到着すると彼はすぐに皇帝のそばへ進む機会を得た<sup>(27)</sup>。[25] 彼はその人のもとへ近づこうとしたのだが、その場の入口を片足で跨いだとたん、後ずさりして戻った。[26] すると取り次ぎ役の宦官や居合わせた人たちがその人に前に進むようしきりに促したが、彼は一言も答えることなく、気が触れた人のようにそこから離れ、投宿していた部屋に戻った<sup>(27)</sup>。彼の従者らがなぜそうしたのかと問いただしたところ、彼はあからさまにこう述べたという。すなわち、神霊どもの支配者<sup>(27)</sup>が宮殿の玉座に座っているのを見た、彼と話をするのも彼に何か頼みごとをするのも不相当だと思った、と。[27] だがどうして、この男が罪深き神霊でないことがあろうか<sup>(27)</sup>。彼が飲み物、食べ物、あるいは眠りを存分にとることは決してなかった。彼は用意されたものにはほとんど手をつけず、夜の不自然な時間帯に宮殿をうろついていたが、愛欲の営みには神霊のごとく執着した<sup>(27)</sup>。

[28] またテオドラの愛人のある者どもが言うには、彼女がまだ舞台にいたとき、夜中に神霊のようなものが彼らの前に現れ、彼らが彼女と夜を過ごしていた部屋から彼らを追い出したという。一方、マケドニアという名の踊り子がアンティオキアの青組に所属し、大いなる権勢を振るっていた。[29] というのも彼女は、まだユスティヌスの帝権を支配していたユスティニアヌスに様々な書簡をしたため、東方の有力者のうち彼女が望んだ人々を苦もなく滅ぼし、彼らの金を国庫に没収していたからである。[30] 人々が言うには、このマケドニアはあるときエジプトとリビアからやって来たテオドラを歓待したのだが、彼女がエキボリオスからひどい扱いを受けたのに加え、その道中で金もなくしたことで非常に立腹し、悲嘆に暮れているのを知ると、運命は再び彼女の大金の守護者になりうると言い、その女を大いに慰め勇気づけた<sup>(28)</sup>。[31] 人々の話では、テオドラは当時、その夜に夢が彼女を訪れ、富についていかなる心配もせぬよう命じた、と語っていたという。[32] 実際、彼女はビザンティオンにやって来た後、神霊どもの支配者の寝床に入り、あらゆる手を用いて彼と妻たる女として同居し、そしてそうすることで彼女はすべての金の主人となるであろう。

## XIII章

ほとんどの人々の考えでは事態はそのようであった。一方、ユスティニアヌスは他の性格についてはすでに明かされたとおりであったが、出会う人々には穏やかで自らに近づきやすいふうに振るまっただうえ、何人に対しても謁見を拒むことなく、彼の前で無作法に立ったり声を出したりする者に激することもまったくなかった<sup>(281)</sup>。[2] それゆえ逆に、彼から破滅させられる予定の人々に対しても、彼は顔を赤らめなかった。実際、彼は怒りや憤激のかけらさえ見せずに反抗した人々と対面しており、穏やかな顔をし、眉を下げ、落ち着いた声を発しつつ、何の咎もない何万もの人々の殺害と、町々の破壊と、あらゆる金の国庫への没収を命じていた。[3] ある人はこの性格から、その人が子羊の心をしていると推測するであろう。けれども、かりに誰かが、過ちを犯した人々への取り成しを彼にしきりに要請、懇願したならば<sup>(282)</sup>、彼はどう猛になって歯をむき出しにし<sup>(283)</sup>、はちきれそうになったため、以後、彼と親密そうな人々による依頼は一切期待できなくなった。

[4] 一方、彼はキリストについては堅い信仰を持っているように思われたが<sup>(284)</sup>、これさえ臣下の滅びにつながった。というのも彼は、司祭らにいっそう恐れなく隣人を圧することを許可し、境を接する人々のものを奪った彼らを祝福し、その行いをもって神的なものへの敬虔さと思っていたからである。[5] またかりに誰かが、自分のものではない何かを聖なる名目でひったくり、勝ち誇って立ち去るなら<sup>(285)</sup>、彼はそうした裁定を下しつつ、それを聖なる行いとみなしていた。現に彼は、正義の真価を司祭らとその敵に優越することに認めていたのである。[6] そして彼自身は、存命中の人々や亡くなった人々の財産を不適切なやり方で獲得すると、信心を名目にすぐにそれらをどこかの教会に寄進して名譽欲を満たしていたが、そうした財産が被害者に戻らないようにするのもその狙いであった。[7] さらに彼はこれらのために、途方もない数の殺人を犯していた。というのも、彼はキリストについてのあらゆる信仰を一つにまとめようと熱心に取り組み、他の人々を何の道理もなく殺害しだしたからだだが、これらも、彼は信心を名目に行っていた<sup>(286)</sup>。亡くなる人々の信仰が彼のそれと同じでなかったならば、それは彼には人々の殺しとは思われなかったのである。

[8] こうして人々の絶えざる滅びは彼がしきりに求めたものであり<sup>(287)</sup>、それをもたらす口実を妻とともに編み出すことを彼は決してやめなかった。[9] この二人はほとんど姉妹のような欲望を抱いており、それぞれ性格的に異なってはいたがともに邪悪であり、まったく異なる面を示しつつ臣下を殺害していたからである<sup>(288)</sup>。[10] 実際、彼はその意思において塵煙よりも軽く、それが博愛や損失にいたらない限り、いつも彼をその時々で適当な場所へ誘導しようと望む人々にしたが<sup>(289)</sup>、へつらいの言葉を果てしなく受け入れてもいた。[11] おべっか使いたちは、彼が宙に運ばれ空を歩くよう造作もなく彼を説得していたのである<sup>(290)</sup>。

[12] あるとき彼の相談役であったトリボニアヌス<sup>(291)</sup>は、彼がいつかその敬虔さのゆえに人知れず天に召し上げられはしないか本当に怖い、と言った。だがそうした称賛ないしからかいを、彼は頑なな心で受け止めていた。[13] また場合によっては、彼は誰かの徳性を褒め称え、すぐ後に邪悪な男だと罵った。また部下の誰かを中傷した後、訳もなく態度を変えて彼に賛辞を送った。[14] 彼の見解なるものは、彼自身が明らかにそう語ったり望んだりしたこととは逆の立場から進んだからである。[15] ところで友情および敵意に関する彼の気質がどうであったかは、たいていの場合その人になされたことを証拠に挙げてすでに述べた。[16] 確かに彼は敵としては着実かつ不動である一方、友人にとってはまったく当てにならなかった。結果、彼は自分が取りたてた人々のほとんどを滅ぼす一方、憎んでいた人々を友にすることは決してなかった。[17] また彼は、もっとも馴染み深く親密でもあるように思われた人々、つまり遠からず滅ぶことになった人々を、伴侶や別の誰かに恩恵として授けた。だが彼は、彼らがただ彼への好意のためだけに死ぬということをよくわかっていた。[18] 彼はその非道さと金銭欲を別にすれば、万事において明らかに不誠実だったからである。また彼をそれから引き離すことは誰にも不可能であった。[19] だがその妻は、彼を説得できずにいた事柄に関し、その仕事から大金が生じるという期待を彼に抱かせ、まったく本意ではなかった夫に、彼女が望むやり方で実行させていた。[20] さらに彼は適切ならざる利益のために法を制定したり、逆にそれらを廃止したりすることに何の躊躇も覚えなかった<sup>(292)</sup>。

[21] また彼は、自らが書いた法にしたがってではなく、金への大いなる期待や壮大な約束に導かれるかのように、その決定を下していた。[22] 何らかの理由によったり、予期されざる告発をなしたり、存在しなかった遺言書を口実にしたりしてすべてを奪うことがかなわなかった場合も、彼は、臣下の財産を少しずつ盗み取るという行為が、自らに恥をもたらすとは思ひもしなかったからである。[23] また彼がローマ人を支配する間、神への信仰も教理も堅固ではなく、法律は定かではなく、取引は確かではなく、契約に意味はなかった<sup>(29)</sup>。[24] だが彼と親しい者どもが彼からある活動のために送られたとき、かりに彼らが出くわした人々の大勢を殺害し、一定の金品を奪ったならば、すべての指示を忠実に遂行したとして、彼らはすぐに皇帝から栄誉ある者とみなされ、そう称えられた。だが彼らが人々に対して幾分の慈悲を示して彼のもとに上がると<sup>(30)</sup>、彼は彼らに不満を抱き、その後は敵対した。[25] 彼はまた、その男たちの性質には何か古風な点があると失望し、もはや任務に就かせることはなかった。その結果、彼らはそうした行為に不慣れであったにもかかわらず、多くの者が己の邪悪さを彼に示そうと張り切りだした。[26] 彼はまた誰かと何度も約束をし、宣誓か書面でその約束をより強固にしたとたん、自発的に忘却し、その行いが彼に栄誉か何かをもたらすと信じていた。[27] そしてユスティニアヌスはこれらを臣下に対してだけでなく、私が先に述べたように、敵の多くに対してもなしていた<sup>(31)</sup>。

[28] 彼はほとんどと言ってよいほど眠らず<sup>(32)</sup>、食べ物や飲み物に満足することも決してなく、指先でほんの少しつまんだだけで離れていた。[29] というのも彼にとってそうしたことは、あたかも自然が彼に負わせた片手間仕事のごとくに見えたからであり<sup>(33)</sup>、復活祭と呼ばれる祭日の前に定められた期間やその他の時期には、二日二晩、彼はほとんど何も食べずに過ごしていた<sup>(34)</sup>。[30] すなわち、すでに述べたその二日間、彼はひたすら食事をとらず、わずかの水と野生の草だけで過ごすべきと考えており、場合によっては一時間ほど眠っただけで、後の時間は延々と辺りをうろうろしていた<sup>(35)</sup>。[31] けれども、もし彼がその同じ時間を善行に当てようと望んだなら、物事は大いなる幸福に向かって進展したであろう。[32] だが今や、彼はその本性の強さ

をローマ人の苦しみのために用い、彼らの国家全体を大地に崩すことに成功した。というのも彼は、来る日も来る日も臣下にとってより激しい災いを創出するためだけに、ずっと目覚めたまま、頑張っせと働くことをその責務と任じていたからである。[33] つまり述べられたように、彼は不浄なる行いを案出するにひときわ鋭く、それを完遂するにも迅速であったため<sup>(36)</sup>、彼の本性的な善さえも臣下の破滅に帰結していたのである。

#### XIV 章

それは物事にとって非常に好ましくならぬ時代であり、いかなる慣例もとどまらなかった。私は少しだけ言及しようと思うが、残りのすべてについては、この著作が果てしなくならぬよう沈黙せねばならない。[2] まず彼自身は皇帝の位にふさわしいものは何も持たず、それを他の人と守護すべきとも考えておらず、言葉と身なりと思考の点で、むしろ蛮族のようであった<sup>(37)</sup>。[3] 彼は、彼の名で書かれるべきと思ったすべての文書について、しきたりどおりキエストルの称号を有する者に手配を命じることはせず、その言葉はあのようにであったけれども、自らがそのほとんどを発行することに重きを置いており<sup>(38)</sup>、また居合わせた大勢の者は [...] <sup>(39)</sup>、結果、そこで不正をこうむった人々はその告発をする相手を見出せずにいた。[4] また彼は皇帝の機密文書を書く職務を、もとはと言えばそのために設置されていたアシクリティスと呼ばれる人々<sup>(40)</sup>に委ねることもせず、言うなればあらゆるものを彼自身が書いており、とくに都市の裁定官らに何か指示する必要があるれば、彼らがいかにしてその判決に向かうべきかを書いていた。[5] つまり彼は、ローマ人の国家において独自の考えで判決を下すことを誰にも認めず、係争者の一方の話を聞いただけで自らが気ままに来たる判決を用意していた。また彼は何の調査もせず、下された判決を即座に覆していたが、それは彼が何らかの法や正義に導かれたからではなく、紛れもなく利益への強欲に屈したからである<sup>(41)</sup>。[6] 彼の飽くことのない欲望はそのすべての恥を取り除いたため、皇帝は賄賂をもらっても恥じなかった。

[7] また元老院および皇帝によって是認された事柄もたびたび異なる決定に帰着した。[8] というのも元老院は、投票にも立派なことにも力を及ぼさず、体裁と古法のためだけに参集し、まるで絵画に

おけるかのごとく座っていたからである。そこに集まった人々の誰も一言さえ発してはならなかったのである<sup>(30)</sup>。また皇帝とその伴侶はたいいていの場合、係争する連中のいずれかを支持し対立するふうをしていたが、それらの問題について彼ら自身の間で合意された側が勝利していた<sup>(30)</sup>。[9] また法を犯した者にとって、勝利したかが定かでないように思われたならば、彼はさらなる金をその皇帝に渡し、それ以前にあったものとは正反対の法をすぐに確保した。[10] だがかりに別の誰かがそれを、つまり廃止されたほうの法を求めるならば、皇帝はそれを呼び戻して再度定めることをまったくためらわなかった<sup>(30)</sup>。よって何一つ確かな力のうちに立つことはなく、正義の重りは、より多くの金がそれをより強く引っ張ることのできる方向へ向け、勝手気ままに揺れ動いた。そしてかつて宮殿にあった物事は今や広場の公共の場にあり、店々は判決のみならず立法をも販売していた。

[11] 一方、レフェンダリオスと呼ばれる者たちにとって、嘆願者の求めを皇帝に取り次いだり、慣わしのおりに嘆願についての彼の見解を長官らに逐一伝えたりするのはもはや十分な務めではなく、彼らはあらゆる人から不正なる言葉を集めたい<sup>(30)</sup>、いんちきや惑わしのようなものを用いてユスティニアヌスを騙していた。彼はそれらを駆使する人々になびく性質だったのである<sup>(31)</sup>。[12] そして彼らは外に出るやいなや、彼らと付き合いのあった連中の敵対者を監禁し、誰も弁護されず反証もなければ、彼らにとって必要なだけの金を稼いでいた<sup>(31)</sup>。[13] また宮殿で護衛の任に就いていた兵士らは、皇帝の柱廊<sup>(32)</sup>にいる裁定官のそばへやって来て、暴力をもって判決を引き出していた。[14] そのとき言うなれば全員がそれぞれの持ち場を放棄し、以前は彼らにとって未踏であったり通行不能であったりした道を勝手に進み、あらゆる事態は間違った形で生起して固有の名を何もとどめず<sup>(33)</sup>、国家は遊ぶ子供の王国のようでもあった<sup>(34)</sup>。[15] しかしこの話の始めで述べたように<sup>(35)</sup>、その他のことは省略せねばならない。だがその皇帝を説得し、裁決に際して賄賂を取らせた最初の男が誰であったかは語られることになる。

[16] キリキア出身のレオンという者がいたが<sup>(36)</sup>、彼は神霊のごとく金銭欲に囚われていた。このレオンはすべてのおべっか使いの中で最有力とな

り、無教養な人々の心にその考えを吹き込むことができた。[17] また彼のある説得は暴君の愚かさとして結託し、人々の破滅をもたらした。彼こそがユスティニアヌスを説得し、金で判決を売らせた最初の男である。[18] またこの男がすでに言われた方法で盗みを働こうと決めたとき、彼はもはや止まらず、その悪は道を進んで巨大なものとなり始めた。また上流層の誰かに対する不正な裁きをしきりに得ようとする者は誰でも、ただちにレオンのもとへ行き、係争中の財の一部を暴君および彼のものとするを約束し、不当にも即刻の勝利をおさめ、宮殿を後にしていた。[19] こうしてレオンはまさに莫大な金を集めることに成功し、広大な土地の所有者にもなったが、ローマ人の国家に膝をつかせる最大の原因にもなった。[20] 契約した人々のための城砦もなければ、法も、誓約も、文書も、決まった刑罰もなく、レオンと皇帝に金が送られることのほかは何もなかった。[21] 実のところ、こうしたこともレオンの考えの定かさの中にはとどまらず、彼は反対側の人々からも金を稼ぐことを有益と見ていた。[22] というのも彼はつねに双方から盗みつつ、彼を信頼していた人々を無視することも、反対側から進むことも、まったく恥とは思わなかったからである。[23] ただ利益だけが生じるならば、双方を行き来しても自らに恥ずべき点はないと彼は考えていたのである。

## XV 章

つまりユスティニアヌスはこのような人であった。一方、テオドラはその考えをいつまでも、その確固たる非道さのうちに固定していた。[2] というのも彼女は他人からの説得や強制を受ける形で何かをしたことは決してなく、独断で動きながらその目論見をあらゆる力でなし遂げ、何人もあえて、過ちを犯した者のための取り成しをしなかったからである。[3] 時間の経過も、処罰の過多も、嘆願の方策も、死の脅威も、天から全民族に降りかかりうるものの何であれ、彼女を説得してその憤怒を鎮めさせることはなかった。[4] つまるところ、何人もかつて、テオドラが反抗した者と和解するのを見たことがなく、その者が人々の間から消去された後もそうであったが、死去した者の息子は皇妃の憎悪をあたかも父親の別の遺産であるかのように受け継ぎ、それを後の三世代にわたって送っていた。[5] 彼女の

熱意は人々の滅びのために稼働する万全の態勢となっており、その停止は不可能だったのである<sup>(317)</sup>。

[6] ところで彼女は必要以上に、しかし彼女の欲求よりは控えめに、体に気を遣っていた。[7] 実際、彼女は非常に早くに浴室に入り、湯につかってから<sup>(318)</sup>非常に遅くに上がり、そこから朝食に取りかかった。[8] そして朝食をとった後は休息した<sup>(319)</sup>。だが昼食と夕食をとる際には、あらゆる種類の食べ物と飲み物を味わった。また非常に長い睡眠が、すなわち日中は夕暮れまで、夜中は日の出まで、いつも彼女を捕まえていた<sup>(320)</sup>。[9] こうして彼女はあらゆる不摂生の道を一日のそれだけの時間をかけて進みながら<sup>(321)</sup>、ローマ人の国家全体を支配すべきと考えていた。[10] そしてかりに皇帝が彼女の考えによらず、誰かに何かの任務を指示したならば、その男の諸問題は運命のそれに面したこととなり、ほどなく彼はひどい侮辱を受けつつ職務を解かれ、もっとも恥ずべき死により滅ぶ結果となった<sup>(322)</sup>。

[11] 実際、ユスティニアヌスにとってすべてをなすのはたやすいことだったが、それは彼が気楽な性格をしていたからだけでなく、すでに言われたように、彼がほとんど眠らなかつたうえ、万人の中でもっとも近づきやすかつたからでもある<sup>(323)</sup>。[12] たとえまったく有名でなかつたり高貴でなかつたりしても、人々には、その暴君と謁見する自由のみならず、会話をしたり秘密の話をしたりする自由さえも広く認められていたのである<sup>(324)</sup>。[13] 一方、皇妃のもとへは、長官らの誰一人として、多大な時間や労苦なしに近づくことはできず、全員がいつも奴隷のような細心の注意をもって、狭くて息が詰まりそうな部屋でひたすら待機していた。というのは、どの長官にとっても場を離れることは耐え難いほど危険だったからである。[14] 彼らはずっとつま先で立ち、それぞれ自分の顔を近くの者のそれより高くするよう背伸びしていたが、これは内側からそこへ来る宦官たちに彼らを見てもらうためであった。[15] そして何日もたった後でようやく、彼らのある者どもは呼び出しを受け、ひどく恐怖しながら彼女のもとに進み出て、拝跪してそれぞれの足の甲に唇で触れただけで、即刻立ち去っていた<sup>(325)</sup>。[16] 彼女は話しかけることも何かを求めることも指示せず、何の自由もなかつたからである。つまり国家は奴隷状態に陥ったうえ、彼女を奴隷教師に任じたのである。[17] こうしてローマ人の物事は、一方で

は暴君の非常に良いように見える性質によって、他方ではテオドラの気難しくきわめて厄介な性質によって破壊されていた。[18] なぜなら良い性格のうちには不安定があり、厄介さのうちには無為があったからである。

[19] それゆえ違いは彼らの考えと生活に示されていたが、金銭欲、殺しへの欲望、そして誰にも真実を語らないことでは彼らは同じであった。[20] というのは、両者ともこのうえなく巧みに欺くことができたからであり<sup>(326)</sup>、かりにテオドラに楯突いた人々の誰かが、何かささいな、また言及にすら値しないような過誤を犯したとの報告がなされれば、彼女は即座にその人には何の関係もない容疑を作り出し、その問題を巨大な悪事へと高めていた。[21] 大量の告発が聴取されるとともに、既存の制度を廃止するための法廷が開かれ<sup>(327)</sup>、彼女から呼び出しを受けた裁判官たちが集っていたが、その決定の非道さにより、彼らのうちの誰が皇妃の意向をもっとも満たすことができるかと、彼らは互いに争論するばかりであった。[22] こうして彼女は過ちを犯した人の財産をすみやかに国庫に没収し、たとえ古くからの高貴な家柄の人であったとしても、彼を苛烈に痛めつけ、追放あるいは死で罰することをまったくためらわなかつた。[23] だが、彼女につきしたがった連中の誰かが不正な殺しや他の重罪のかどで逮捕されるようなことがあれば、彼女は告発者の活動をあざけて笑い、生じた事件について、意にまったく反する形で彼らに沈黙をしいていた。

[24] 一方、彼女は必要と思われるたびに、まるで舞台や劇場におけるかのように、真面目きわまる物事を道化へと転じることを事としていた。[25] あるとき貴族階級<sup>(328)</sup>に属し、要職を長く務めた一人の老人が、彼女の従者のある者どもから彼が貸していた大金を取りたてることができなかつたため、彼女のもとを訪れ、その契約者を咎めようと、また正義への支持を彼女に求めようとした。私自身はよく知っているのだが、その人の不面目が果てしなきものとならぬよう、名については言及しないでおこう。[26] このことを事前に知ったテオドラは、その貴族が彼女のもとに来れば全員で彼を取り囲み、彼女が述べることをしかと聞くように宦官どもに指示し、彼らがいかなる言葉で応ずべきかを伝えた<sup>(329)</sup>。[27] その貴族は後宮に入ると、彼女に対して拝跪するしきりにならって拝跪し<sup>(330)</sup>、「お妃様」

と涙を流さんばかりの姿で言った。「貴族の男が金銭を必要とするのは苦しいことです。[28] ほかの人たちにとって許しと情けをもたらす問題は、この階位の者には恥辱とみなされてしまうものです。[29] 極端に困窮するほかの人には、当の問題を債務者に語ることで、起こった悩みから即座に解放されることが可能でしょうが、貴族の男は、かりに債務者に返す金を用意できなければ、それを話すことを最悪の恥と思うことでしょう。しかし、かりに話したとしても、彼は決して信じてもらえないでしょう。なぜなら、この位の者が貧困と同居することは不可能だからです。[30] しかしかりに本当に信じてもらえたとしても、彼には未曾有の恥辱と悲哀が降りかかることでしょう。[31] お妃様、確かに私には債務者がおります。ある者どもは彼ら自身の金を貸しており、別の者どもは私から借りております。[32] ひたすら圧迫してくる貸し主たちを、階位にちなむ恥ゆえに私は追い返せないしておりますが、借り主たちは、たまたま貴族身分ではないことから、いろいろの非道な口実に頼っています。[33] ですので、私に正義の支持と目下の苦難からの解放をたまわりたく、切に、伏して、心よりお願い申し上げます」。彼はこのように語った。[34] すると妻は「貴族よ、誰それは<sup>(331)</sup>」と整然と答え、宦官の歌唱隊がそれに続けて「あなたは大きなヘルニアをお抱えです」と応じた。[35] だが再びその人が嘆願し、先に話されたのと似た内容のことを述べると、哀れな人が話すのをやめてしきたりどおりに拝跪し、立ち去って家路につくまで、彼女は同じように答え、歌唱隊もそれに応じ続けた。[36] ところで、彼女は一年の大半を海辺の別邸、とりわけイリオンと呼ばれる屋敷で過ごしていたため<sup>(332)</sup>、従者の大群は多大の不幸をかこっていた<sup>(333)</sup>。[37] というのも彼らは必需品に事欠くとともに、海の危険と隣り合わせでもあったから。とりわけ、ときたまの嵐が発生するとき、あるいは海の怪獣がその付近で躍り上がるときがそうであった<sup>(334)</sup>。[38] しかし彼ら自身は<sup>(335)</sup>、彼らの贅沢な暮らしが可能である限りは、あらゆる人の災いを何の問題とも思わなかった。[39] だが私は、齒向かった人々に対するテオドラの態度がどのように現されていたかをただちに明らかにしよう。ただし無際限の骨折りと思うことがないよう、若干の事例への言及にとどめた。

## XVI 章

アマラスンタがゴート人らとの滞在を切り上げて生活の装いを変える決意をし、私が以前の著作で述べたように<sup>(336)</sup>、ビザンティオンへの旅に出ようと考えていたとき、テオドラは、その女が高貴な生まれでかつ王妃であり、また非常に見た目が良く、その欲することをまさに容赦なく策動することを考慮する一方、彼女の堂々たるたたずまいととりわけその男らしさにも猜疑を募らせた。だが同時に彼女は夫の軽率さに懸念を感じ、嫉妬をむき出しにしたうえで、その女を待ち伏せし死にいたらしめる計略に着手した。[2] こうして彼女は即座に夫を説き伏せ、ペトロスただ一人を特使としてイタリアへ送った<sup>(337)</sup>。[3] 皇帝は派遣された彼に、私がふさわしい著作で述べたことを指示していたのだが、その箇所では皇妃への恐怖ゆえに、なされたことの真相を明示できなかった<sup>(338)</sup>。[4] だが彼女は、その女を可及的速やかに人々の間から消すことだけを命じ、もし命令を実行すれば大金が入ると期待をその男に抱かせた<sup>(339)</sup>。[5] 人間の本性は、何らかの要職あるいは大金の獲得が見込まれる場合、不正なる殺しに嫌々臨むことを知らないものであるから、彼はイタリアに現れると、いかなる勧告を用いたのか私は知らないのだが、テウダトスを説得してアマラスンタを殺害させた<sup>(340)</sup>。その結果、彼はマジストロスの位に加えて、大いなる権力と万人からの類なき憎悪を手に入れた。

[6] つまりアマラスンタにまつわる事件はこのように終わった。[7] さてユスティニアヌスにはプリスコスという名の秘書がいたのだが<sup>(341)</sup>、彼は非常に邪悪なパフラゴニア人であり<sup>(342)</sup>、君主を喜ばせることに気質的に長けてもおり、彼に対してきわめて好意的であると同時に、彼からも同じ好意を受けていると思っていた。結果として、彼はまたたく間に、不正な方法で大金の持ち主となった。[8] テオドラは彼が横柄であり彼女への抵抗を試みているとその夫に誹謗していた。[9] 当初、彼女は何の成果も得なかったが、少し後の真冬にその人を船に乗せ、彼女が望んだ場所まで送ってその髪を剃り、まったく乗り気でなかった彼を無理やり司祭にした。[10] だが彼は、プリスコスについての出来事を何も知らないという様子をして、彼がこの地のどこにいるのか調査もせず、以後彼を想起することもなく、あた

かも昏睡状態に陥ったかのごとく黙って座っていた。だが彼はその人が打ち捨てていったわずかな金をすべて奪った。[11] ところで彼女が、蛮族の生まれではあったが見栄えのする若者、アレオピンドスという名の一人の従者と熱愛関係にあるとの疑惑が持ちあがった。彼女はたまたま彼を家令に任じていたのだが、非難をかわそうと思い、人々が言うにはその男を激しく愛していたにもかかわらず、当分の間、何の理由もなしに凄惨な拷問を彼に科すこととした。以後、彼について我々は何も知らなかったし、今日まで誰も彼を見ていない。[12] 実のところ、何らかの仕業を隠すのが彼女の望みである場合、それは誰からも話されず示唆されることすらなく、事情を知る者が身内の誰かに伝えることも、またかりに非常に詮索好きな人がいたとして、その知りたがる者が調査することも許されなかった<sup>(34)</sup>。[13] というのも、そうした恐怖は人間が誕生してからこのかた、いかなる僭主からも生じなかったからであり、反抗した人々の誰も察知されずにいることは不可能であったから<sup>(34)</sup>。[14] すなわち、大勢の隠密が広場や家屋で話されたり行われたりすることを彼女に報告していたのである。[15] また反抗した者への処罰を決して広めたくないとき、彼女はこのようなしていた。[16] その男がかりに有力者であったとすれば、彼女は彼を内々に呼び出し、従者のある者に内々に引き渡し、ローマ人の国家の辺境へ彼を移送するよう指示した。[17] そして彼は真夜中に、布でくるまれ縛られた人を船に乗せ、女から自らに命じられた場所まで同行し、かの地でその任務を専門とする人に決して人目につかぬように引き渡した。そしてその人への厳重な監視を命じたうえ、皇妃がその哀れな人に同情を示すまで、あるいは彼がかの地での長きにわたる不幸によって死を望み、衰え、息絶え、解き放たれるまで、他者への口外を禁じた<sup>(34)</sup>。

[18] さらに彼女は、自分をひどく中傷したとして、緑組の一人で目立つ若者でもあったバシアノスに怒りを募らせた。結果、つまりその怒りを彼が耳にしたからなのであるが、バシアノスは大天使教会に逃げ込んだ<sup>(34)</sup>。[19] だが彼女はすぐさま民衆を管轄する長官を彼に向かわせ、中傷の容疑では彼を呼び出さないよう指示し、少年愛の罪を彼にかぶせた<sup>(34)</sup>。[20] 長官は聖域からその男を連れ出し、耐え難い罰を科し始めたのだが、民衆はみな、気高く、

気楽な暮らしで養われた体がそうした不幸に面するのを見ると、すぐにその苦しみを思って気落ちし、嘆きながら天に向かって叫び<sup>(34)</sup>、その若者への取り成しを求めた。[21] だが彼女はさらに激しく彼を罰してその陰部を切断し、反論の機会も与えぬまま彼を殺害したうえ、その財産を国庫に没収した<sup>(34)</sup>。[22] かくしてその女的なものが猛威を振るう間、聖域も法律による規制も現実ではなくなり、罪を犯した者を自由にする町の嘆願も可能には見えず、他のいかなるものも彼女には直面しなかった。

[23] また彼女は、優雅であり皇帝を含め誰からも好かれたディオゲニスという男に対しても、彼が緑組の一員であったことから怒りを募らせ、男同士の結婚という重罪で誣告することを熱心に試みだした。[24] すなわち彼女は彼の家人の中の二人を説得し、主に対する告発者および証人に仕立てた。[25] この人がしきたりどおりの完全に秘密の状態ではなく、公共の場で尋問されたとき、ディオゲニスの名声ゆえに、多くの著名な裁判官が選ばれていたのだが、とりわけ彼らが奴隷の少年であったがために、家人の言葉は正確さを求める裁判官には、判決に際して信用に足るものとは思われなかった。すると彼女はディオゲニスの親友の一人であるテオドロスをいつもの小部屋に閉じ込めた<sup>(35)</sup>。[26] その場で彼女は多くのおべっかと責め苦を彼に浴びせた。だが何も彼女にもたらされなかったため、彼女は牛革のひもをその人の頭の耳のあたりに巻きつけ、ひねってきつくするよう命じた。[27] するとテオドロスは彼の両目がもともとあった場所から跳び出すかのように感じたが、事実でないことは何も捏造するまいと決めた。[28] こうして裁判官たちが、法的証拠が不十分であるとしてディオゲニスを放免した結果、町は全民衆の祝祭を開いた<sup>(35)</sup>。

## XVII 章

それはこんなふうが生じた。一方、彼女がベリサリオス、フォティオス、ブジスに対して行ったすべてのことはこの著作の始めて述べられた<sup>(32)</sup>。[2] またキリキアの生まれの二人の青組の過激派が、第二キリキア<sup>(33)</sup>の長官であるカリニコス<sup>(34)</sup>に突如大声をあげながら近づき、長官とすべての民衆が見ている前で、一番近いところに立って主人を守ろうと努めた彼の馬番を殺した。[3] その後、彼は逮捕された過激派に対し、その殺しと他の多くの罪への処罰を

科したが、彼女はこのことを知ると、自分が青組をひいきしていることを示したうえで、まだその職務を担っていた彼を理不尽にも、殺人者の墓のそばで突き刺した<sup>(65)</sup>。[4] 皇帝とはいえば、殺害された人のために泣いて悲しむふうを装いながら<sup>(66)</sup>、ぶつぶつ言って座っていた。彼はその行いに加担した連中にたくさんの脅しをかけたが何も果たすことなく、ただ亡くなった人の大金を奪うことだけに執心した。

[5] 一方、テオドラは体を用いた罪人らへの入念な処罰を考慮していた。彼女は、生計を立てるため行為ごとに3オボロス<sup>(67)</sup>の金をもらっていた500人以上の売女を広場の真ん中で集め、反対側の大陸に送って改心修道院と呼ばれる場所に閉じ込め、その暮らしの衣替えを強制した<sup>(68)</sup>。[6] そのある連中は夜中に高いところから飛び降りていたが、そうすることで本意ならざる変革からの自由を得ていたのである。

[7] ところでビザンティオンには、父親を含め三世代にわたるコンスルの家柄であるのみならず、古くから元老院の最有力者の血筋を引くという、二人の姉妹の少女がいた。[8] 彼女らは以前結婚したが、たまたま夫が死去したせいで寡婦となった。するとテオドラはただちに粗野で感じの悪い二人の男を選び、彼女らが賢明な暮らしをしていないと咎めたうえ、彼らとの同居をしきりに勧めた。[9] 彼女らはそれが実現するのではないかと危惧し、ソフィアの聖堂に逃げ込んで聖なる洗礼堂に入り、そこにあった洗礼盤をしっかりとつかんだ。[10] だが皇妃は恐ろしい強制と悲惨を彼女らに示したため、彼女らはそうした厄災から逃れるべく、彼らとの結婚にすすんで応じることにした。かくして彼女から穢されたり侵されたりしない場所はどこにもなかった<sup>(69)</sup>。[11] 彼女らはそして、高貴な生まれの求婚者がいたにもかかわらず、その位からは遠く隔たった貧乏な男たちと嫌々ながら同居した。[12] また同じく寡婦であった彼女らの母親も、あえて不幸に対して泣き叫んだり取り乱したりはせず、その結納に立ち会った。[13] がその後、テオドラはその穢れを清めようとして、民衆の不幸と引きかえに彼女らに償いをすることを決意した。[14] つまり彼女はそれぞれの男を要職に就けたのである。だが少女らに慰めがもたらされるどころか、私が後の著作で述べるように<sup>(70)</sup>、ほぼすべての配下とその男たちのゆえに、絶望的で耐え難い苦難を味わうはめになっ

た。[15] ただその意向さえ満たされていれば、テオドラは要職の格にも国家の評判にも他の何にも配慮しなかったのである。

[16] また彼女がまだ舞台にいたとき、たまたま彼女は一人の愛人との子を身ごもったのだが、気づくのが遅すぎたためか、またそれがほぼ人間の形になり終えていたためか、習慣どおり墮胎のためにあらゆる手を尽くしたものの、時機を逃した胎児をまったく死なせることができなかった<sup>(71)</sup>。[17] こうして何も功を奏さなかったため、彼女は試みをあきらめ、出産せざるをえなくなった。だが生まれた子の父親は、母親になってしまった以上これまでどおりには体を使った仕事ができないと、彼女が途方に暮れて悲しんでいるのを見て、本当に彼女がその子を始末するような予感を覚えたため、その子を取り上げ、男児であったことからヨアンニスと名づけ<sup>(72)</sup>、そして向かう予定であったアラビアへと出発した。[18] その後、彼自身の命が尽きそうになったとき、ヨアンニスはすでに若者になっていたのだが、父親はその母親にまつわる話のすべてを彼に明かした。[19] そして彼は、人々の間から見えなくなった父親のための慣行をもれなく行い、ほどなくビザンティオンに到来すると、母親への取り次ぎを普段行っている人々に対しその用件を伝えた。[20] 彼女が人間的な性質から外れることは何も思慮しないだろうと推測した彼らは、彼女の息子のヨアンニスが来ていると母親に報告した。[21] だが彼女は、その話が夫に伝わりはしないかと懸念しつつ、その子を彼女の前に連れてくるように命じた。[22] そして彼女は姿を現した人を見ると、平素そうした任務を担っていた従者のある連中に彼を引き渡した。[23] その哀れな人がいかなる方法で人々の間から消されたのか、私は言うことができないし、今日まで、つまり皇妃が亡くなった後も、彼を見たという人はいない<sup>(73)</sup>。

[24] また当時、ほぼすべての妻が性格面で墮落するということが生じた。というのも、彼女らは夫らに対してあらゆる権力を用いて罪を犯し始め、その行いの危険や危害といったものを何もこうむることがなかったからである。姦通のかどで逮捕されたとしても、彼女らは何の罰も受けずにすんだ。すなわち、彼女らはすぐに皇妃のもとへ出向いて話をし、もともと何の告発もなかったにもかかわらず、夫らへの対抗訴訟を起こしていた。[25] 他方で、

彼らは反証の機会も用意されないまま、妻の持参金の倍を払われ、鞭で打たれ、ほとんどの場合は投獄され、さらにはめかしこんだ姦夫がいっそう大胆に姦婦と交合するさまを眺めることとなった。だが姦夫どもの多くはその行為のゆえに荣誉に浴していた。[26] 結果として、ほとんどの男たちは以後、妻から苦しめられる反面、不浄なる行いについては黙認し、鞭打ちがないことを大いに喜び、彼女らには検挙の可能性がないことを保証した<sup>(364)</sup>。

[27] 彼女は国家にかかわるすべてのことを独断で仕切り動かすことを欲していた。実際、彼女は、ある人がその地位に関して立派でないか善良でないか、また彼女からの指示を遂行しえないかという点だけを絶えず調べて確認を取りつつ、要職および司祭職を選任していた。[28] さらに彼女はすべての結婚を、神的な権力のようなものを用いて差配し始めたが、人々は結婚の前に、意に反する形で婚約を交わしたことはなかった。[29] 実際、それぞれの男は唐突に妻をめとっていたが、それは蛮族にもおなじみの形式、すなわち彼の気に入ったからというのではなく、テオドラの望むところだったのである<sup>(365)</sup>。[30] その苦難は逆に、女の側でも生じていた。というのも、彼女らはまったく本望ではない男たちと一緒にいることを強いられていたから。[31] また彼女はしばしば、何の理由もなく花嫁を花嫁の間から連れ去り、花婿については結婚させずに放り出し、自分の気には入らないと感情をあらわにして言った<sup>(366)</sup>。[32] そのことを彼女は多くの人に対して行っていたが、レフェンダリオスの称号を帯びていたレオンと<sup>(367)</sup>、マジストロスになったエルモゲニスの子、サトルニノスもそれに含まれた<sup>(368)</sup>。すなわちこのサトルニノスには、従弟の娘にあたる、気高くて美しい処女の婚約者がいたのだが、エルモゲニスとすでにその生を終えていたため、父親のキリロス<sup>(369)</sup>がその娘を彼に与える約束をしていた<sup>(370)</sup>。[33] そして彼らの花嫁の間が閉鎖されるまで彼女は花婿をとどまらせ、ついで別の花嫁の間へと導き、泣き叫んでいた彼をフリソマロの子と結婚させた。[34] なおフリソマロ自身はかつて踊り子であり遊女でもあったが、このときは別のフリソマロおよびインダロとともに宮殿で生活していた<sup>(371)</sup>。[35] 彼女らは男根や劇場での暮らしの代わりに、そこで物事を管理していたのである。[36] 一方、その花嫁と同衾したサトルニノスは、彼女が処女を失っていたこと

に気づき、親友のとある者に、貫通ずみの女と結婚してしまったとこぼした。[37] これがテオドラの耳に入ると、彼女は、自分のものではないことで鼻高々かつ有頂天になっているとして、学校に通う子供への仕打ちのごとく、従者らに彼を宙に持ち上げるよう命じ、その背中を何度も鞭打ち、馬鹿になるなど強く言った。

[38] ところで彼女がカッパドキアのヨアンニスに対して行ったことは以前の著作で述べられた<sup>(372)</sup>。彼女は怒りに駆られてあれらを彼になしたのだが、それは彼が国家に対して危害を加えたためではなかった。その証拠に、後に家臣らにより恐ろしい行いをなした人々の誰についても彼女はそれをしていない。それはむしろ、彼が様々なことであえて彼女に真っ向から逆らう態度をとり、皇帝の前でも彼女を中傷したために、あやうく夫が彼女と刃をまじえそうになったからである。[39] 私が先に述べたように、ここではとくに諸原因の中でもっとも真なるものを述べるのが肝心である<sup>(373)</sup>。[40] 彼女が彼をエジプトで監禁したときも<sup>(374)</sup>、彼は私が先に彼について記した苦難に面していたのだが、彼女はその男への処罰にまったく満足することなく、彼への偽証者の探索を決してやめようとしなかった。[41] そして4年後、彼女はキジコスにおいて緑組に属する二人の過激派の男を見つけることに成功したが、彼らは主教に反逆した連中の一味と言われていた<sup>(375)</sup>。[42] 彼女は彼らにおべっか、議論、そして脅しを浴びせたため、一方はおののきながらも希望で胸をふくらませ、その殺しの穢れをヨアンニスになすりつけた。[43] だが他方は、本当にもうじき死ぬと感じられるほど拷問にひしがれながらも、真実に反することは何も話すまいと決意した。[44] 結果、彼女はその策謀によってはどうしてもヨアンニスを始末することができず、両方の若者の右手を切断した。一方は彼が偽証にまったく応じなかったため、他方は陰謀を決して露見させないためであった。[45] だがこれらが広場の人目につく場でなされたときも、ユスティニアヌスは出来事的一切に関知しないふうをしていた<sup>(376)</sup>。

## XVIII 章

だがある者は、人々に対して彼がなした害悪の大きさを見積もることで、彼が人間というよりはむしろ、述べられた通り<sup>(377)</sup>、人間の形をした神霊のたぐ

いであったことを実証しうるのである。[2] というのも、なし遂げる者の力は、なされた事々の行き過ぎにおいて明らかになるから<sup>(38)</sup>。[3] さて彼によって滅ぼされた人々の数を正確に示すことは、何人にも、神にすら決してできないように私には思われる。[4] 私が思うに、ある者は、この皇帝が滅ぼしたすべての人よりも、すべての砂のほうを早くに数え上げるであろう。だが住民がいなくなってしまった土地のほとんどを計量すると、一万の何万倍も、さらにその何万倍もが潰滅したと私は言う<sup>(39)</sup>。[5] 相当の広がりを持つているリビアもこうして滅んだ結果<sup>(40)</sup>、長旅をする者が誰かに出くわすのは困難かつ、言及に値することになった。[6] 実際、ヴァンダル人がかの地で最初に武器を取ったとき、彼らは8万人もいたのだが<sup>(41)</sup>、彼らの妻、子、そして従者の数を、誰が言い当てるだろうか。[7] また私もそのほとんどを直接目にする機会があったのだが<sup>(42)</sup>、かつては町々に暮らし、大地を耕したり海で仕事をしたりしていたリビア人のその膨大な総数を、人はいかにして算出できるだろうか。また彼らよりも多くのムーア人がそこにいたが、彼らはみな、妻や子孫ともども破滅されるはめになった。[8] さらにローマ兵とビザンティオンから彼らにつきしたがった人々の多くも、大地が覆い隠した。それゆえ、かりに誰かがリビアで500万もの人が滅んだと強く主張しても<sup>(43)</sup>、私が思うに、彼は決して事態を十分に述べることにはなるまい。[9] その理由は、ヴァンダル人がすぐに敗北を喫した後も、彼がその土地の支配を固めることに気を配ることも、彼による富の確保が臣民の確固たる善意のうちにあることを考慮することもなかったこと、さらには以後、彼がリビア全土を気ままに支配し、飲み込み、略奪する目的で、ペリサリオスを、専制という彼にはまったく不当な嫌疑をかけたうえで<sup>(44)</sup>、即座に、間髪をいれずに呼び戻したことである。

[10] 実際、彼はすぐさま土地監察官らを送り、以前には存在しなかった過酷な租税を課した。また優良な領地があれば、彼はそれらを自分のものに<sup>(45)</sup>、アリオス派に対しては彼ら自身の秘蹟から締め出していた。[11] また彼は軍隊<sup>(46)</sup>への支払いを遅らせ、その他の面でも彼は兵士らの重荷になっていた。これらを発端とする諸反乱は、大いなる破滅に帰結した<sup>(47)</sup>。[12] というのも、彼は既成の物事のうちにとどまることは決してできず、すべてをか

き回し混乱させることに固執したからである。

[13] リビアの3倍もの大きさのイタリアは余すところなく、かの地をはるかに上回る規模で無人の地となった。結果として、そこで破滅させられた者の数を明らかにするのは手近なことであろう<sup>(48)</sup>。[14] 私はすでに、イタリアで生じた事々の原因を記述している。つまり、リビアにおけるのとまったく同じことが、ここでも彼によって犯されたのである<sup>(49)</sup>。[15] 彼はロゴテティスと呼ばれる者どもを派遣し、すぐにすべてをひっくり返し、滅ぼし始めた<sup>(50)</sup>。[16] またゴート人の支配は、この戦争の前にはガリア人の地からダキアの境界まで広がっていたが、そこにシルミウムという都市<sup>(51)</sup>がある。[17] ローマ軍がイタリアに到着したとき<sup>(52)</sup>、ガリアとヴェネト人の地の大半をゲルマン人が保持していた<sup>(53)</sup>。[18] だがゲピド人がシルミウムとその周辺を、手短かに言うなら、まったくの無人の地のすべてを領有している<sup>(54)</sup>。[19] というのも、戦争がある人々を、また戦争に付随して生じた疫病と飢饉が別の人々を殺したからである。[20] またヘラスおよびヘルソニソスの地にあり、イオニア湾<sup>(55)</sup>からビザンティオンの郊外まで広がるイリリウムとトラキア全土を、フン人、スクラビニ人、そしてアンテ人が、ユスティニアヌスがローマ人の支配を受け継いで以来、毎年のように攻撃し<sup>(56)</sup>、かの地の人々に致命的な仕打ちをなした。[21] 私が思うに、1度の侵入で滅ぼされたり奴隷にされたりしたかの地のローマ人は20万以上に及び、結果として、そこはすみずみまでスキタイ人の荒野と化している<sup>(57)</sup>。

[22] つまりこれらがリビアとヨーロッパにおける戦争でもたらされたことである。一方、サラセン人は<sup>(58)</sup>その時代、東方のローマ人をエジプトからペルシャの国境にいたるまでひっきりなしに攻撃し、まさしく絶え間なく征服したため、かの諸地域の人口はきわめて少なくなった。私が思うに、調査したところで、何人もこうして滅んだ人々の数を決して突き止めることはできないだろう。[23] またペルシャ人とホスローはローマ人の別の支配域に4度も侵入し、諸都市を攻略し<sup>(59)</sup>、占領された諸都市や各地で捕らえた人々を、一部は殺し、一部は彼らとともに連行し、彼らが行き当たった土地から住民を失わせた。[24] そして彼らがコルクスの地に侵入してから今日まで、彼らとラジキ人とローマ人には破滅が生じている<sup>(60)</sup>。

[25] 実のところ、ペルシャ人であれ、サラセン人であれ、フン人であれ、スクラビニの民であれ、他のいかなる蛮族であれ、ローマ人の地から無傷で去ることはかなわなかった。[26] というのも彼らは移動中や、とりわけ攻囲と敵との交戦のさなかに多くの災いに直面し、同じ規模で同時に滅ぼされたからである。[27] つまりローマ人だけでなく、ほぼすべての蛮族も、ユスティニアヌスの血への飢えにあずかったのである。[28] またホスロー自身も邪悪な性格をしており、私がふさわしい箇所述べているように、この男は戦争のすべての動機を彼から付与されていた<sup>(40)</sup>。[29] すなわち、彼はその活動を時機に合わせることに価値を見出さず、時機を外してあらゆることに取り組み、いつも平和や休戦のさなかに、裏切りの心をもって隣人への戦いの口実をこしらえる一方で、戦いのさなかに訳もなくたじろぎ、金銭欲のゆえに行動の準備をきわめてずさんに行い、さらにその勤めの代わりにあの天空の事柄を観察し、神の本性について興味を募らせてもいた<sup>(40)</sup>。また彼は、血に飢えた殺人者であったことから戦いをやめず、必要なことには理不尽な努力しかなかったことから、敵に勝利することもできなかった<sup>(40)</sup>。[30] 彼がこうして統治する間も、全地はローマ人とほぼすべての蛮族の人血で満たされ続けた<sup>(40)</sup>。

[31] まとめて言うならば、戦争のゆえにこれらのことがこの時代に、ローマ人のあらゆる土地で生じたのである。[32] 一方、ビザンティオンや各都市での争乱で生じたことを数え上げてみると、それにとまなう人々の殺しは戦争によるものに引けを取らなかったと私は思う<sup>(40)</sup>。[33] 実際、犯罪に対する司法や同等の取り締まりはなきに等しく、両党派の片方が皇帝から支持されたため、両方ともまったく静穏を保つことなく、一方は抑圧されるため、他方は大胆になるために、彼らはつねに絶望と狂気とを見ていた。そして群衆がときには互いに向き合い、ときには少人数で戦い、また場合によっては一人の男を不意打ちするなど、32年もの間、彼らは一時も休むことなく、相互に救いがたい仕打ちをなし、その多くは民衆を管轄する機関により殺されていた。[34] だがほとんどの場合、悪事への処罰は緑組の側だけで生じていた。さらにサマリア人と異端者と称される人々への処罰もローマ人の国家を殺して一杯にした。[35] だがこれらのことは、少し

前に私が十分に記したところであるから、ここでは要約の形で言及するにとどめる<sup>(40)</sup>。

[36] これらが、その体に宿った神霊のゆえにあらゆる人に起こったことであり、皇帝となった彼自らがその原因を与えたのである。実際、隠された力と神霊の本性により、彼が人々に及ぼしたあらゆる害悪を、私が明らかにしよう。[37] 彼がローマ人の諸問題を取り仕切っていたとき、別の多くの災いが生じたのだが、ある人々はそれらの発生を、邪悪な神霊のこの実在および策謀によるものと力説し、またある人々は、神的なものが彼の所業を嫌い、ローマ人の国家にも背を向け、残忍なる神霊どもに場を譲ってそれらをこの形で成就せしめたとした。[38] 後の著作で私が書いているであろうが、スキルトス川がエデッサで氾濫し、かの地の人々にとっての何万もの不幸の創造者となった<sup>(40)</sup>。[39] またナイルはいつも通りにかさを増したが、ふさわしい時期になってもかさが減らず、私が以前記したように、恐るべき事態を住民にもたらした<sup>(40)</sup>。[40] またキドノスは何日も氾濫してタルソスのほぼ全域を呑み込み、そこに回復不能な害を与えるまでもとに戻らなかった<sup>(40)</sup>。[41] さらに東方随一の都市であるアンティオキアとその近隣に位置するセレウキア、そしてキリキアでもっとも名高いアナザルボスを地震が襲った。[42] そこで一挙に亡くなった人々の数を、誰が数え上げることができよう。またある者は、イボラ、たまたまポントスの第一の都市であったアマシア、フリギアにあってピシディア人がフィロミリ<sup>(41)</sup>と呼ぶ町ポリボトス、イピロスのリフニドス、そしてコリントスといった、古来ひときわ多くの人口を擁した諸都市を加えうるであろう。[43] その時期に、これらすべてが地震で崩壊し、ほぼすべての住民とともに滅んでしまった<sup>(41)</sup>。[44] その後、私が先に言及した疫病が生じ、生存者のおよそ半分を連れ去った<sup>(41)</sup>。[45] ユスティニアヌスが初めにローマ人の国家を統治し<sup>(41)</sup>、そして後に帝権を手にしたときに、そうした人々の滅びが起こっていたのである。

#### 註

<sup>(22)</sup> たとえば本書 20. 7 以下、26. 15 など。『新勅法』 20、29 も参照。

<sup>(23)</sup> 少なくとも 27 の都市にユスティニアヌスの名が与えられた (ユスティニアノポリス、ユスティニアナ)。その他にも官職名 (praetor Iustinianus) や部隊名 (Iustiniani

- Vandali, Numidae Iustiniani, Scythai Iustiniani, etc.) など。より詳しくは、Kaldellis, 2010, p. 50, note72 を参照。
- (224) たとえば本書 8. 5.
- (225) ここで非難の対象となっているのは、まさにプロコピオス自身が『建築物』において褒め称えている建築群であろう。
- (226) 453年のアッティラの死後、フン人の勢力は衰えたとはいえ、なおいくつもの氏族が帝国北方を脅かしていた。マララス『年代記』17. 10 (520/23年) にユスティヌス治世の事例についての記述がある。
- (227) 『スーダ』[Ἐμμισθοί] の項目に似た記述がみえる。
- (228) 当時のペルシャ人を指す、古典主義的用法。
- (229) スクラビニ人 (Σκλαβηνοί) とアンテ人 (Ἄνται) はドナウ川北方に暮らし、しばしばイリリクムやバルカン半島を荒らした。アンテ人はしばしばスクラビニ人とともに記述されるが(『戦史』3. 14、マウリキウス『ストラティギコン』11. 4など)、その性格はよくわかっていない。なおウィリアムソンとカルデリスは「スクラビニ人」の代わりに「スラヴ人」(Slavs) と訳しているが、当時のスラヴ諸族の総称がかならずしも明確でない以上、「スクラビニ人」と訳するのが適切であろう。詳細は F. Curta, *The Making of the Slavs. History and Archaeology of the Lower Danube Region c. 500-700*, Cambridge, 2001.
- (230) 『戦史』2. 10. 23 および 2. 19. 12、また本書 18. 22、23. 6-9、24. 12 を参照。
- (231) 本書 1. 3.
- (232) アラムンダロス (アル・ムンディル al-Mundhir 3世、治世 505-554年) は現在のイラク南部に拠を置いたラムム朝の王。
- (233) “ὄγκ ἀπαρακαλύπτως”. デューイングとカルデリスの英訳では意味が逆になっている。
- (234) ペルシャとの間には 532年に和平協定が結ばれ、ローマ側に 110ケンテナリア (すなわち金 792,000枚) の貢納が課せられた(『戦史』1. 22. 3-5)。マララス『年代記』18. 76によれば、31年ぶりの和平実現であった。アラムンダロスやフン人に対するペルシャ攻撃への働きかけについては、『戦史』2. 1. 12-15、2. 3. 47、2. 4. 20、2. 10. 16. 和平協定そのものは、ホスローによる 540年のシリア侵攻によって終わりを迎えた(マララス『年代記』18. 87)。
- (235) αἵρεσις はもともと「選択」や「取得」を意味する語であったが、キリスト教的な文脈では「正統信仰 ὀρθοδοξία」との対比で誤った信仰を指すのに用いられた。プロコピオスはこの言葉を、『戦史』においては両方の意味で用いる一方 (たとえば『戦史』3. 7. 22 および 5. 13. 10)、『戦史』よりも後に書かれた本書ではキリスト教的「異端」の意味でのみ用いている (この箇所および本書 19. 11)。
- (236) モンタノス派は 2世紀後半、フリギアに興り、禁欲的な信仰生活を説いて 8世紀まで続いた。
- (237) ノヴァティアノス派の司祭サッパティオスを開祖とし 4世紀末に始まったサッパティオス派は、キリスト教の復活祭をユダヤ教の暦にしたがって祝っていた。この教理に対しては、すでにテオドシウス 2世の立法がある(『勅法彙纂』1. 5. 5に収録)。
- (238) ユスティニアヌスの異端に対する立法として、『勅法彙纂』1. 5. 12-22; 『新勅法』37、42、45、109、115. 3. 14、131. 14、129、132. マララス『年代記』18. 7 (528年) には、「彼(ユスティニアヌス)の治世には様々な異端が弾圧され、エクサキオニテスと呼ばれるアリオス派を別として、それらの教会が没収された」とあり、ユスティニアヌスは 527年 8月に単独皇帝となってすぐに広範な異端対策に着手したものと思われる。
- (239) アレクサンドリアの司祭アリオスの活動に始まり、三位一体論を否定するアリオス派は、すでに第 1回ニケーア公会議で異端宣告されていたが、なおコンスタンティノープルや帝国の内外、とりわけゲルマン諸族の間で勢力を保っていた。彼らの富の大きさについてのプロコピオスの証言や、治世初期におけるユスティニアヌスの寛大な政策から、マラヴァルはアリオス派が、当時の社会上層に多くの信徒を持っていたのではないかと推測している (Maraval, 1990, p. 170)。
- (240) Cf. 『勅法彙纂』1. 5. 12 (527年) は、アリオス派に彼らの教会を持つことを認めている。この立法は、上註 238で引用されたマララス『年代記』18. 7 (528年) の記述と符合する。
- (241) こうした改宗活動について、エフェソスのヨハネ (あるいはアミダのユハンナン) の事例はよく知られている。単性論派の指導者であった彼は 542年、現地住民の改宗のため、ユスティニアヌスからエフェソスに派遣された。彼は後にシリア語で記した著作の中で、8,000人を改宗させたと述べている。John of Ephesus, “Lives of the Eastern Saints (II),” ed. E. W. Brooks, in *Patrologia Orientalis* 18 (1924), pp. 511-698: p. 681. このヨハネとその作品については、S. A. Harvey, *Asceticism and Society in Crisis. John of Ephesus and the Lives of the Eastern Saints*, Berkeley / Los Angeles, 1990, pp. 28-43 を参照。
- (242) サマリア人は、今日まで存続するユダヤ教徒の一派である。『勅法彙纂』1. 5. 17-19 (528-529年) は彼らを異端と同一視し、シナゴークの破壊を命じている。マララス『年代記』18. 35 (529年) には、「第 7インディクティオンの 6月、民族反乱が生じ、サマリア人がキリスト教徒とユダヤ人に立ち向かい、スキトポリスの多くの場所がサマリア人自身により火を放たれた」とあり、反乱の原因は示されていないが、ユスティニアヌスの立法に由来したことは疑いない。彼らの反乱は、パレスティナ総督テオドロスにより鎮圧された (下記 27節以降)。マララス『年代記』18. 35のほか、和田廣「ユスティニアヌス一世帝の異端迫害政策について」『史潮』20 (1986)、18-30頁も参照。
- (243) 迫害を逃れるため、高位官職に就くため、見せかけの改宗は常習化していた。本書 27. 7や『勅法彙纂』1. 5. 18. 5のほか、Kaldellis, 2010, pp. 53-54, note 82 も参照。
- (244) マニ教徒はすでにテオドシウス法典において死刑の対象であり(『勅法彙纂』1. 5. 11-12. 3)、高位の者として例外ではなかった。マララス『年代記』17. 21 (527年) によれば、ユスティヌス治世にマニ教徒への迫害が行われ、元老院議員エリトリオスの妻やその他の女たちを含む人々が処罰された。マララス『年代記』18. 30 (529年) には、ペルシャ王国内にマニ教徒が出現したことを受け、王カワードがゾロアスター教の祭司らとともに迫害を開始し、死刑と財産没収で彼らの根絶を図ったとする記述がある。
- (245) 529年のサマリア人の反乱の展開と結末についてはマラ

- ラス『年代記』18.35の記述が詳しい。それによると、彼らは盗賊の頭のユリアノスを皇帝に擁立し、多くのキリスト教徒を殺害したウエネアポリスに移動し、同地の戦車競技を観戦後、勝者となったキリスト教徒のニキタスを殺害した。その後、パレスティナ総督の率いる軍勢に敗北を喫し、ユリアノスは処刑され、その首は王冠とともにコンスタンティノーブルに送られた。また戦いを通じて2万人のサマリア人が死亡し、2万人の少年少女が奴隷として東方の商人に売られた。上註241も参照。
- 246) ここでのヘレネスは、蛮族(バルバロイ)との対比でのギリシャ人ではなく、キリスト教以前の伝統的な多神教を奉じる異教徒を意味し、ラテン語では *pagani* がそれに対応する。マララス『年代記』17.9(520年)には、ラジキ王ズタティオスがペルシャ人の「ヘレネスの教義」を拒絶し、ペルシャ支配からも離反し、コンスタンティノーブルで洗礼を受けたとの記述があるが、ここでの「ヘレネスの教義」が指すのはゾロアスター教のことであろう。国内の異教徒に対する立法については、『勅法彙纂』1.5.18.4-5およびマララス『年代記』18.42(529年:「また同じ年にヘレネスの大迫害が生じ、多くの人が財産を没収された。…そしてそれにより大なる恐怖が生じた」)を参照。なおマララスがそこで言及する法的措置は、死刑と財産没収のほか、公職追放と3ヵ月以内の国外退去である。
- 247) ここに示されるのは、プロコピオスが『秘史』の後に執筆を予定していた『教会史』のことであろう。上註19を参照。
- 248) 少年愛ないし同性愛に対する立法については、『勅法彙纂』9.9.30、『新勅法』77、141、『法学提要』4.18.1を参照。またここでのプロコピオスの記述に対応するのは、マララス『年代記』18.18(528年)の記述である:「また同じ年に、様々な管区の主教のある者どもが、身体的な害悪を犯し男色に走ったとして告発された…。」処罰を受けたとされるのはロードス主教イサヤスおよびトラキアのディウポリス主教アレクサンドロスであり、イサヤスは拷問の後、追放され、アレクサンドロスは性器を切除された後、担架で市中を引き回された。
- 249) 535年に創設された *ἐπι τοῖς κλέπταις* / *praetor plebis* のこと。本書20.9を参照。ここでの占星術師への迫害との関連が指摘されているのは、マララス『年代記』18.47(529年)にある、アテネでの哲学および諸慣習(*νόμιμα*)の教育の禁止である。J. Beaucamp, “Le Philosophie et le joueur. La date de la «fermeture de l'école d'athènes»,” *Travaux et Mémoires* 14 (2002), pp. 21-35; P. Magdalino, *L'Orthodoxie des astrologues. La science entre le dogme et la divination à Byzance (VIIe-XIVe siècle)*, Paris, 2006, pp. 27-32を参照。なおマララスの続く箇所には、各都市で賭博を行った人々が手を切断され、ラクダに乗せられ引き回されたのと記述がある。
- 250) 本書25.25及びアガティアス『歴史』2.30-31を参照。
- 251) ジノンが過去の皇族に連なる人物であったため、ユスティニアヌスの潜在的なライバルであった。彼については PLRE III B, p. 1418 を参照。
- 252) アンテミオス(治世467-472年)はコンスタンティノーブル出身の西方皇帝。
- 253) 正確な年代は不明(527-548年の間)。
- 254) タティアノス(PLRE III B, p. 1219)は520、527年に官房長官 *magister officiorum* / *μάγιστρος τῶν ὀφφικίων* として確認される(『戦史』2.10.2にもタティアノスという人物が登場するが、これが同一人物かどうかは不明)。
- 255) ディモステニス(PLRE II, p. 353-354)は521年と529年にオリエンス道長官 *praefectus praetorio Orientis* として確認される。532年に死亡。
- 256) このイララ(PLRE III A, p. 598)についてはこの箇所以外では知られていない。
- 257) 『学説彙纂』29.7(*De iure codicillorum*)を参照。
- 258) このディオニシオス(PLRE III A, p. 403)もこの箇所以外では知られていない。
- 259) このヨアンニス(PLRE III A, pp. 641-642)は542年、人質としてホスローのもとに差し出された。『戦史』2.21.27を参照。
- 260) 『スーダ』[*ἐπίδοχος*]の項目に引用されている(ただし銀貨の枚数は「1千枚」である)。
- 261) ダラスはペルシャに対する最前線の要塞。ここでプロコピオスはユスティニアヌスが私人の用意した身代金を横取りしたとするが、マララス『年代記』18.21(528年)には、トラキアに侵入したフン人との戦いに関連して、次のような記述がある。「そして彼らはその二人を捕虜として得て、ローマ人の皇帝から1万枚の金貨を得たため、コンスタンティオロスを返還した。そして彼はコンスタンティノーブルに戻った」。
- 262) マララス『年代記』18.23では、火事で財産を失ったエウラリオスという人物の遺言を十全に執行するため、ユスティニアヌス自身が、エウラリオスの三人の娘の官殿での養育や嫁資の用意、債務の帳消しといった種々の手配をなし、資産価値の不足から相続に反対したマケドニオスなる管理人を叱責したという話が語られる。この話の真正性については措くとして、相続やとりわけ遺言状の偽造は帝国において大きな問題となっていた(本書28.1-15)。マラヴァルによれば、535年以降に発布された168の新勅法のうち30が相続の問題にかかわっている(Maraval, 1990, p. 171)。
- 263) 532年1月に起こったニカの乱は、青緑両組によるユスティニアヌスに対する大規模な反乱であり、彼らが反乱に際しての合言葉を「ニカ」(「勝て」、「勝利せよ」の意)としたことからニカの乱と呼ばれた。ペリサリオスを始めとするユスティニアヌス配下の軍人が鎮圧に当たり、ヒッポドロームに集結した3万以上の暴徒を殺害したとされる。暴徒が彼らの皇帝に擁立した、アナスタシウスの甥のイパティオスは、同じくアナスタシウスの甥で反乱に加担したポンペイオスとともに処刑された。ユスティニアヌスはその後、イパティオスとポンペイオスおよび敵対したすべての元老院議員の財産を没収したとされている。詳しくは『戦史』1.24およびマララス『年代記』18.71を参照。
- 264) 本節全体が『スーダ』[*ἀποκναίειν*]の項目に引用されている。
- 265) 『スーダ』[*παλαμναῖος*]の項目に引用されている。
- 266) [βροτολογῶ ἤστην]。正確に対応する表現は見えないが、ホメロス『イリアス』5.31、アイスキュロス『断片集』665などと比較せよ。『スーダ』[βροτολογῶς]の項目に引用されている。
- 267) 『スーダ』[*ἀνθρωποδαίμονες*]の項目に引用されている。
- 268) ここでは双数形ではなく複数形(*ἄνθρωποι*)が用いら

れている。

(269) 本書 18. 36-45 を参照。

(270) ユスティニアヌスの母の名はヴィギランティア。マラヴァル (Maraval, 1990, p. 172, note 8) は、誕生に関して似たような言い伝えがある例として、アレクサンドロス、スキピオ、アウグストゥス、ホスロー (偽ゼカリヤ『年代記』9. 6) を挙げている。出生の超自然的な性格が記される点で、ルカ福音書の受胎告知との関連も注目に値しよう。

(271) 『スーダ』[πόρω τῶν νυκτῶν] の項目に引用されている。ユスティニアヌスは聖職者たちと夜を徹して神学議論に励んだとされる。本書 13. 28-30、15. 11、18. 29、『戦史』7. 32. 9、および『新勅法』8 の序文を参照。

(272) 『スーダ』[δίαυλος] の項目に引用されている。

(273) 頭のない (ἀκέφαλος) 神霊のモチーフは、旧約聖書偽典の一つである『ソロモンの契約』に現れるが、マラヴァル (Maraval, 1990, p. 172, note 15) はプロコピオスが確実にそれを知っていたと見ている。Cf. C. C. McCown, *The Testament of Solomon*, Leipzig, 1922, Ch. 9.

(274) 『スーダ』[ἰσχυρίζετο] の項目に引用されている。マイヤーとレップン (Meier / Leppin 2005, S. 307) は、本節がエフェソスのヨハネに影響されたものと推測しているが、プロコピオスが『秘史』を執筆した 550 年までにヨハネのシリア語の著作を読めたかどうかは定かではない。Cf. John of Ephesus, "Lives of the Eastern Saints (I)," ed. E. W. Brooks, in *Patrologia Orientalis* 17 (1923), p. 22. なおアッシュブルック・ハーヴェイ (Ashbrook Harvey, op.cit., p. 31) はヨハネの『聖人伝』の執筆時期を 560 年代末、収録エピソードの年代を 520 年代から 560 年代の間としている。

(275) 本書 13. 1、15. 11 を参照。ユスティニアヌス治世に修道士が地方の人々の代表として首都へ派遣された事例はほかにもある。聖サバス伝の著者スキトポリスのキリロスは、530 年にサバスが請願のためにパレスティナからコンスタンティノーブルを訪れたことを記述している。E. Schwartz, hrsg., *Kyryllos von Skythopolis*, Leipzig, 1939, S. 171-173. また、エフェソスのヨハネの『聖人伝』には、アレクサンドリアに暮らしていた隠者マレが、カルケドン派による宗教迫害に憤激し、コンスタンティノーブルに出向いて皇帝と皇妃を直に非難したという記述がある。Cf. Kaldellis, 2010, pp. 148-150.

(276) 『スーダ』[εἰσαγωγεύς]、[κατέλευεν]、[παραπλήξ] の項目に引用されている。

(277) [τῶν δαιμόνων τὸν ἄρχοντα]。この表現は新約聖書のマルコ 3. 22、マタイ 12. 24、ルカ 11. 16 のほか、『ソロモンの契約』にも見られる。Cf. Maraval, 1990, p. 172, note 18.

(278) 『スーダ』[ἀλιτηρίους] の項目に引用されている。

(279) 『スーダ』[δαιμονίως] の項目に引用されている。ユスティニアヌスの禁欲的な側面については本書 13. 28-30、15. 11、『建築物』1. 7. 7-11 を、彼の愛欲への執着については本書 9. 30-32 を参照。

(280) ユスティニアヌス治世にアンティオキアで権勢を振るっていたマケドニアなる女は、マララス『年代記』17. 7 (518/20 年) でユスティニアヌス治世初期の出来事として言及される大柄な女のことかもしれない。それによると、この女はキリキア出身でその体軀はきわめて大きく、帝国全土を物乞いとして旅し、やがてアンティオキアに現れ、

各仕事場から銅貨 1 枚を徴収したという。エキボリオスは、本書 9. 27 でテオドラの愛人として言及されるエキボロスと同一人物。

(281) ユスティニアヌスへの近づきやすさについては、本書 15. 11 および 30. 21-26 も参照。

(282) [ἱκεσίους λιταῖς]。二詞一意 Hendiadys による表現。

(283) アリストファネス『平和』620 を参照。本書 1. 13 で同じ表現がテオドラに対して用いられている。

(284) ユスティニアヌスは一貫してキリスト教の守護者として振る舞っていたが、その立場はカルケドン公会議の信条を支持するカルケドン派のそれであった。対してテオドラは単性論派であったことが知られている。ユスティニアヌスの教会政策については、たとえば『新勅法』7, 123, 131, 148 など。

(285) 「聖なるものの言葉 ἱερῶν λόγῳ」という表現は、プロコピオスによるキリスト教への批判と読むこともできる。

(286) プロコピオスはユスティニアヌスの極度に不寛容な教会政策を非難しているが、非難の矛先はキリスト教そのものにも向いているように思われる。エフェソスのヨハネの『聖人伝』は、帝国東方や首都の単性論派の立場から見たユスティニアヌスの宗教迫害についての豊富かつ詳細な証拠を含む。

(287) 『スーダ』[φθόρος] の項目に引用されている。

(288) 両者の見せかけの差異については、本書 10. 15、14. 8、27. 13 を参照。

(289) 本書 22. 30 で同じ表現が用いられている。

(290) アリストファネスが『雲』225-228 でソクラテスを皮肉って用いた言葉。同じくプラトン『ソクラテスの弁明』19c、および本書 18. 29、20. 22 も参照。

(291) トリボニアノス (PLRE III B, pp. 1335-1339) はローマ法集成グループの一員、後にその長として活動した (528-534 年)。また 529 年からキエストルとしてユスティニアヌスに仕えた。トリボニアノスは 532 年のニカの乱の際にその職を解かれるも (『戦史』1. 24. 16)、翌年には官房長官 *magister officiorum* として復帰し、535 年には再びキエストルとなっている (『戦史』1. 25. 1)。彼については本書 20. 16-17 も参照。

(292) 本書 14. 10 を参照。

(293) ユスティニアヌスの法政策については本書 11. 2 も参照せよ。

(294) マラヴァル (Maraval, 1990, p. 21) に従い、この箇所の動詞を *ἴκοντο* ではなく *ἴκοντο* と読む。

(295) 本書 11. 12 および『戦史』8. 25. 7-10 を参照。

(296) 本書 12. 27 を参照。ヨアンニス・リドス『ローマ国家の要職について』3. 55、および *Corpus Inscriptionum Graecarum*, 8639 にも同様の記述がある。

(297) 『スーダ』[ἄγγαρος] の項目に似た記述がみえる。

(298) 『スーダ』[ἀπόσιτος] の項目に引用されている。

(299) これとほぼ同じ文章が『建築物』1. 7. 8-11 に見られるが、当然、そこでのニュアンスは非難ではなく、称賛である。ユスティニアヌスのほぼ不眠の生活については本書 12. 20、12. 27、15. 11、食事量の少なさについては 12. 27 も参照。

(300) トゥキュディデス『歴史』1. 70. 3、および『戦史』3. 9. 25 と比較せよ。

(301) マラヴァル (Maraval, 1990, p. 174, note 1) はこの箇所について、プロコピオスを含むギリシャ人によるラテン

- 語への蔑視を示すものと解しているが、むしろカルデリス (Kaldellis, 2010, p. 65, note 118) の指摘するとおり、ユスティニアヌスの用いるラテン語の粗さ、洗練のなさを示す表現と見るべきであろう。ユスティニアヌスのラテン語については、T. Honoré, *Tribonian*, New York, 1978, p. 7 を参照。ラテン語話者であったペリサリオスの秘書を長く務めた事実から、プロコピオスはラテン語にも堪能であったと思われる。Cf. W. Treadgold, *The Early Byzantine Historians*, Basingstoke / New York, 2007, p. 179.
- 302 ユスティニアヌス自身はラテン語弁論術の教育を受け、ときに自ら書くこともあったと思われるが、個々の法文の作成についてはキエストルに委ねていた可能性が高い。ユスティニアヌス治世の法文についての代表的研究は Honoré, op.cit. またここでプロコピオスが示す皇帝による文書作成への直接的介入は、帝権による中央統制の進展を反映している。彼は 534 年、地方での政策に関する Rescripa ないし Pragmaticae の中央審査を強化し (『新勅法』152)、541 年の新法では皇帝文書へのキエストルの署名を義務づけた (『新勅法』114)。こうした政策は、ヨアンニス・リドスが述べるように地方官庁による文書実践を衰退させ (『ローマ国家の要職について』3. 20)、皇帝文書の特権状化を促すことになる。P. Classen, *Kaiserreskript und Königsurkunde: diplomatische Studien zum Problem der Kontinuität zwischen Altertum und Mittelalter* (Thessalonike, 1977), S. 219-229 を参照せよ。
- 303 この文では (おそらく転写中のミスにより) 動詞が欠けている。「聴く」、「称える」などの補訂がデュイニングやマラヴァルによって提案されている。
- 304 A secretis / ἀσηκρήτις は皇帝の機密書類を担当する書記官職で、5 世紀から確認される。R. Delmaire, *Les institutions du bas-empire romain, de Constantin à Justinien*, Paris, 1995, pp. 44-45 を参照。
- 305 『スーダ』[ἀνάδικα] に類似した節が引かれている。
- 306 マラヴァル (Maraval, 1990, p. 174, note 4) はこの箇所に関連して、ユスティニアヌスが実際には元老院の権威を高めようとしたことを指摘している。
- 307 両者の見せかけの不一致については、本書 10. 15、13. 9、27. 13 も参照。
- 308 Constitutio Tanta, 21 (『学説彙纂』冒頭) は、ウルピアヌスの言う「法に拘束されない solutus legibus」皇帝の姿をよく伝えている (“Si quid vero, ut supra dictum est, ambiguum fuerit visum, hoc ad imperiale culmen per iudices referatur et ex auctoritate augusta manifestetur, cui soli concessum est leges et condere et interpretari.”)。
- 309 アリストファネス『雲』889 を参照。
- 310 アリストファネス『騎士』632 を参照。
- 311 ラテン語の refendarius に由来する官職。その役割は臣民からの様々な請願や陳情を皇帝に取り次ぎ、皇帝の決定を担当の高官に報告することであった (『戦史』2. 23. 6)。プロコピオスはここで彼らの権力濫用を咎めているが、ユスティニアヌス自身もその是正を図っている (『新勅法』10 など)。
- 312 聖ソフィアの西側に位置した中庭を指す。ここには弁護士や原告など、裁判の関係者が控えていた。『建築物』1. 11. 12、『新勅法』82. 3、またアガティアス『歴史』3. 1. 4 を参照。
- 313 トウキュディデス『歴史』3. 82-83 を参照。
- 314 こうした「王様ごっこ」ないし「王様遊び」については、ヘロドトス『歴史』1. 114 にあるペルシャ王子キュロスの例や、スエトニウス『ローマ皇帝伝』6. 35. 5 のネロの例が著名である。この箇所の修辞上の含意については、A. Kaldellis, *Procopius of Caesarea: Tyranny, History, and Philosophy at the End of Antiquity*, Philadelphia, 2004, pp. 54-55 を参照。
- 315 「この話の始め」は本書 14. 1 を指す。この表現は、プロコピオス自身が本書の章構成をどのように考えていたかに迫る材料になろう。
- 316 このレオンはレフェレンダリオスであった (PLRE III B, pp. 767-768)。本書 17. 31-32、29. 28-36 も参照。
- 317 本節は、主語を「ユスティニアヌス」に変えて『スーダ』[λωφῆσαι] の項目に引用されている。
- 318 入浴はユスティニアヌスの時代も都市住民の日常生活の一部であったが、その後は都市形態の変化とともに一般的ではなくなり、公衆浴場も別の施設に転用されるなどして都市から姿を消した。Cf. M. Rautman, *Daily Life in the Byzantine Empire*, Westport, CT / London, 2006, pp. 76-77. プロコピオスはここで、テオドラによる長時間の入浴を、怠惰かつ不健全な慣行として非難している。
- 319 『スーダ』[ἀκρατίσω] の項目に引用されている。
- 320 『スーダ』[ἀντελαμβάνοντο] の項目に引用されている。古代ローマ人と同じく、ビザンツ人も朝と晩の二度、食事をとっていた。プロコピオスは、テオドラが一般的な二度ではなく、昼食を含めた三度の食事をしてきたこと、さらに慣例よりも長い昼寝をしていたことをやり玉に挙げている。ビザンツ人の食事については、Rautman, op.cit., pp. 46-47 and 94-96 を参照。皇妃の日常については、ヨアンニス・リドス『ローマ国家の要職について』3. 69 も参照。
- 321 『スーダ』[ἀκρασίας] の項目に引用されている。
- 322 一例をカッパドキアのヨアンニスに見ることができる (『戦史』1. 25)。
- 323 本書 12. 20、13. 28 を参照。
- 324 本書 13. 1 を参照。
- 325 この儀礼については本書 30. 21-26 に詳細な説明がある。
- 326 トウキュディデス『歴史』5.82.1 を参照。
- 327 テクストの脱落が見られるが、ここでは Haury にしたがう (καθεστώτων ληΐεσθαι)。
- 328 「パトリキオス」。この称号については、本書 9. 30 も参照。
- 329 カルデリス (Kaldellis, 2010, p. 70, note 135) は、テオドラによる芝居じみた対応とキリスト教の典礼との類似を指摘している。
- 330 拝跪の形式については本書 30. 21-26 を見よ。
- 331 本章 25 節で述べられたように、著者はこのパトリキオスの名を隠している。
- 332 女神ヘラの館を意味する「イリオン Ἰριον」の宮殿は小アジアのボスフォラス海峡沿岸にあり、ユスティニアヌスにより建設された (『建築物』1. 11. 16-17)。同地区にはこのほか 2 つの教会と港も整備されていた (『建築物』1. 3. 10、1. 9. 14、1. 11. 18)。
- 333 マララス『年代記』18. 25 には、テオドラが 4,000 人を率いてピティオンなる場所へ出向き、かの地の諸協会に寄進したことが記されている。
- 334 ここでの「海の怪獣 κῆτος」はクジラを指している。『戦

史』7. 9-16によれば、コンスタンティノープルの人々はクジラのことを「ボルフィリオス」と呼んでいた。このクジラは断続的に、50年以上にわたって彼らを悩ましていたが、サンガリオス川河口で捕らえられ、周辺住民によって処分された。

- (335) ユスティニアヌスとテオドラのこと。
- (336) 『戦史』5. 2. 22-29, 5. 3. 28. 東ゴート王テオドリック(治世489-526年)の娘であるアマラスンタ(PLRE II, p. 65)は、父の死後自身の子であるアタラリック(PLRE II, pp. 175-176)とともに王国を治めた。プロコピオスは『戦史』5. 2. 3で彼女を讃えている。一方、アマラスンタの親ローマの態度は東ゴート王国内部に亀裂を生じさせた。息子アタラリックの死(534年)後、彼女は敵対していた従兄弟のテオダハド(PLRE II, pp. 1067-1068)を共同統治者として迎えることで反対派を抑えようと試みるが、逆に追放・幽閉され、何者かによって暗殺された(『戦史』5. 2. 4)。プロコピオスはここで、アマラスンタ殺害の首謀者をテオドラとみなし、彼女が使節のペトロスを介してテオダハドを動かす、アマラスンタの殺害におよんだとしている。
- (337) パトリキオスのペトロス(PLRE III B, pp. 994-998)は当時の最重要の外交官の一人。彼はコンスタンティノープルでの弁護士としての活動がテオドラの目に留まり、534年に東ゴートへの使節に任じられた。その後、イタリアで3年にわたって獄中生活を送り、コンスタンティノープルに帰還した539年、ユスティニアヌスから官房長官 *magister officiorum* の職を授けられ、以後26年にわたって同職を務めた。561年にはベルシャとの和平締結を実現している。彼はいくつかの著作を残したが、断片的にしかなっていない。ペトロスについては『戦史』5. 3. 30, 5. 7. 11-25, 6. 22. 23-24 および本書24. 22-23も参照。
- (338) 『戦史』においてプロコピオスが明らかにするのは以下のとおり。ユスティニアヌスはまずイタリアの支配を目論んでペトロスを派遣したが(534年; 『戦史』5. 4. 17)、アタラリックの死とテオダハドの即位、そしてアマラスンタの幽閉を知るにおよんで、ペトロスに対し、ユスティニアヌスがアマラスンタを支持することをゴート人に知らしめるよう命じた(『戦史』5. 4. 22)。Kaldellis, 2010, pp. 72, note 142も参照。カルデリスはペトロスが、ユスティニアヌスの命令とは別の命令(すなわちアマラスンタの殺害)をテオドラから受けていたと推測している。
- (339) アリストファネス『騎士』1244を参照。
- (340) ペトロスの派遣については、テオドラとテオダハドおよび彼の妻グデリヴァがやり取りした書簡の中にも言及がある。詳しくはカッシオドルス『雑録』10. 20-21 および Kaldellis, 2010, p. 72 note 144を参照。
- (341) プリスコス(PLRE III B, p. 1051)は諸史料で、元コンスル、近衛長官 *comes excubitorum*、また皇帝の書記官 *ἀπὸ νοταρίων* などの職務や称号とともに言及される高官(マララス『年代記』18. 43; 『テオフィアニス年代記』A. M. 6026ほか)。マララス『年代記』18. 43(529年)には、彼は「怒りを買ひ」、財産没収のうえ、助祭にされ、キジコスに追放されたとあるが、誰の怒りを買ったのかは示されない。
- (342) ここでの「パフラゴニア人 Παφλαγῶν」の喜劇的含意については、Kaldellis, 2010, p. 73, note 146を参照。
- (343) プロコピオスはアレオピンドス(PLRE III A, p. 107)

の事例を引き合い出すことでテオドラの人間関係の面での冷酷さを際立たせている。

- (344) 本書1. 2を参照。
- (345) 『スーダ』[ἀπειτών]の項目に似た記述が見える。
- (346) 当時いくつもの教会が大天使ミカエルに捧げられており(たとえば『建築物』1. 9. 14)、バシアノスが逃げ込んだそれを特定することはできない。
- (347) 『スーダ』[ἐπικαλῶν]の項目に引用されている。少年愛については本書11. 34, 16. 23を見よ。
- (348) 『スーダ』[ἀπήλησαν] および [οὐράνιον γ' ὄσον] の項目に引用されている。
- (349) 『新勅法』134. 13. 2(556年)を参照。
- (350) 本書4. 7を参照。
- (351) この話が史実であれば、ユスティニアヌスがすべての指示を裁判官に与えていたという本書14. 4との矛盾が生じる。本書29. 10も参照。
- (352) 本書1. 11-5. 27(ベリサリオスについて); 1. 31-3. 29(フォティオスについて); 4. 2-12(ブジスについて)。
- (353) アナトリア半島南東部に位置し、タルソスに首府を置いていた。
- (354) カリニコスについてはPLRE III A, p. 260を参照。
- (355) このエピソードはエヴァグリオス『教会史』4. 32でも語られているが、そこではカリニコスを死に追いやったのはユスティニアヌスとされている。
- (356) アリストファネス『アカルナイの人々』746を参照。
- (357) 「オボロス」は古代ギリシアで用いられたコイン。この貨幣はローマ領内では流通していなかったが、名称そのものは存続し、使用されていた。3オボロスは売春の代金を示す俗語であった。B. Baldwin, "Three-Obol girls in Procopius," *Hermes* 120 (1992), pp. 255-257を参照。また、4世紀の教父ニッサのグリゴリオスによれば、カッパドキアのとある集落の公衆浴場の料金は3オボロスであった。Cf. A. P. Kazhdan et al. eds., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, 1991, s.v. "Baths."
- (358) プロコピオスは『建築物』1. 9. 1-10で、ユスティニアヌスとテオドラによる改心修道院の設立および娼婦への施策を肯定的に記している。マララス『年代記』18. 24(528/529年)には、テオドラが、貧者の娘を買い受けて娼婦にしていた女衞らを一斉に摘発し、女衞らには彼らが娘の親に支払った金を返却し、娘らには衣服と金貨1枚を与えてその身を自由にし、以後の女衞行為を禁止したことが記されている。
- (359) 類似の事例として、本書3. 25。
- (360) おそらく予定されていた『教会史』を指している。
- (361) テオドラの妊娠と墮胎については、本書9. 19を参照。
- (362) この息子は他の史料からは知られない。マラヴァル(Maraval, 1990, p. 177, note 7)はプロコピオスによる創作と推測している。
- (363) テオドラが他人を排除する方法については、本書16. 12-17を参照。
- (364) マラヴァル(Maraval, 1990, pp. 177-178, note 7)は、ここでの辛辣な女非難の背後に、ユスティニアヌス(とおそらくテオドラ)による女性の地位向上を目指す政策に対するプロコピオスの不満があったと見ている。P・マラヴァル(大月康弘訳)『皇帝ユスティニアヌス』(文庫クセジュ、白水社、2005年)、129-133頁も参照(129頁:「ユスティニアヌスの法は、女性の地位を向上させた。女性は、

- 神の創造物として、妻として、母として尊重された。そして、男性と同等であると強調された」。
- (365) 類似の事例について、『戦史』7. 31. 13-14.
- (366) アリストファネス『騎士』41を参照。
- (367) このレオンについては本書14. 16および28. 29を参照。
- (368) サトルニノスの父エルモゲニス (PLRE III A, pp. 590-593) は官房長官 *magister officiorum* を務め、外交使節および将官としても活躍し、535/536年に没した。532年のペルシャとの講和に際しても重要な役割を果たしたとされている。『戦史』第1巻を参照。
- (369) キリロスは東方およびアフリカの戦線でベリサリオスに仕えた騎兵隊長であり、536年夏にアフリカで殺害された。
- (370) この婚姻は、両者の父親の没年を根拠として、535-536年に位置づけられる。
- (371) 『スーダ』[*χρυσομαλλώ*] を参照。
- (372) 『戦史』1. 25を見よ。
- (373) 本書1. 3を見よ。
- (374) 541年8月。
- (375) キジコス主教エウセビオスは、カッパドキアのヨアンニスがキジコスに追放された後に、同地で殺害された。『戦史』1. 25. 37-43によれば、エウセビオスは傲慢な態度により現地住民から嫌悪されており、現地の若者の一部が共謀し、町の広場で彼の殺害を実行した。しかし、事件発生の時期がヨアンニスの到着後であったことから、元有力者であったヨアンニスの関与ないし主謀が当初から疑われ、彼は逮捕、投獄され、少し後にエジプトのアンティノオスに再追放された。ヨアンニスの追放については、マララス『年代記』18. 89も参照。
- (376) マララス『年代記』18. 101 (547年) には「そしてディブンディアリストスとあだ名される長官 (コミス) が法務官 (プレトル) であったのと同じ年に、キジコス主教の殺しの場にいたアンドレアスとダンダクスというあだ名のヨアンニスが公の場で尋問され、尋問の後、二人の右手が切斷された」とあるが、キジコス主教殺害犯の処罰に関するそれ以上の詳細は示されない。キジコスでのヨアンニスへの処分が追放のみであり、後に彼はコンスタンティノーブルに戻ったとされていることから (マララス『年代記』18. 89)、プロコピオスが『戦史』1. 25. 40-41で述べるとおり、キジコス主教殺害へのヨアンニスの関与を示す有力証拠は出なかったものと考えられる。
- (377) 本書12. 18-32を参照。
- (378) 18章1-2節は、主語を「テオドラ」に改変した上で『スーダ』[*τεκμήριον*] の項目に収録されている。
- (379) 『スーダ』[*θᾶσον*] の項目に本節全体が引用されている。なおプロコピオスはこの莫大な数の単位を示していない。
- (380) プロコピオスの言う「リビア」は、ヘロドトスにとってそうであったようなアフリカ大陸全体ではなく、ローマの北アフリカ属州、具体的には現在のチュニジア、リビア、アルジェリアの地中海沿岸域のことと思われる。本章13節には、イタリアがリビアの三倍の面積に相当するとの記述がある。
- (381) 533年。プロコピオスは『戦史』3. 5. 18で同数のヴァンダル軍を記している。
- (382) 533年夏、プロコピオスは秘書として、ヴァンダル遠征を皇帝から命じられたベリサリオスに随行して北アフリカに到来し、536年末までのほとんどの期間、同地に留まった。Cf. Treadgold, *op.cit.*, pp. 180-182.
- (383) この数字は明らかに誇張である。『戦史』3. 11における北アフリカ戦役の様子と比較せよ。
- (384) 『戦史』4. 8. 2-5によれば、534年、ヴァンダル戦役で多大な功績をあげたベリサリオスについて、専制の意ありと何人かの将官がユスティニアヌスに訴え出た。皇帝はこれを公表せず、ベリサリオスに対し、グリメルおよび他のヴァンダル人とともに帰還するか、自身は現地にとどまってグリメルらを首都に送るかの選択を求めたところ、皇帝の意図を察した彼は身の潔白を示すべく、首都に戻った (535年)。プロコピオスはそこでも完全に不当な嫌疑としている。
- (385) プロコピオスは『戦史』4. 8. 25で、ヴァンダル戦役の後、おそらくは「土地監察官 *τιμηταί* / *censitores*」として、皇帝から現地に派遣されたトリフォンとエウストラティオスが現地住民から厳しく租税を取り立てたことを伝えている。
- (386) 「*στρατιωτικαῖς συντάξεσιν*」ではなく、*δ्यू*-*ίν*グや *Μ*ハエスクらにしたがって「*στρατιωτικαῖς δυνάμεισιν*」と読む。
- (387) ヴァンダル戦後の兵士らへの支払いの遅れは、ストザスという人物に率いられた反乱の原因になった (『戦史』4. 15. 55)。またユスティニアヌスはヴァンダル人の土地を取得した後もそれらを兵士らへ下賜しなかったこと (『戦史』4. 14. 8-10)、さらには軍隊でのアリオス派信仰を禁止したことも (『戦史』4. 14. 11-15)、一部兵士らの不満および反乱の原因となった。プロコピオスはアフリカのローマ軍内に千人以上のアリオス派がいたしている。北アフリカの動乱については、『戦史』4. 28. 52および8. 17. 22も参照。
- (388) プロコピオス自身はイタリアでの死者数を見積もっていない。
- (389) イタリアでのゴート戦役にとまなう惨状については『戦史』6. 20. 15-33、7. 1. 28-33、7. 9. 1-6を参照。教皇ペラギウス1世の書簡にも戦後のイタリアの惨状が記されている。*Patrologia Latina* 69, 404d-405a, 417c.
- (390) 「*λογοθέται*」(複数、*λογοθέται*) は、ユスティニアヌス期には道長官のもとで財務を担う高位官職であった (たとえば本書24. 2以下)。この官職についてはW. Brandes, *Finanzverwaltung in Krisenzeiten. Untersuchungen zur byzantinischen Administration im 6.-9. Jahrhundert*, Frankfurt am Mein, 2002, S. 88-90も参照。
- (391) 現在のセルビアにある、セルムツカ・ミトロヴィツァ。
- (392) 536年。
- (393) ここでプロコピオスが言う「ゲルマン人 *Γερμανοί*」は明らかにフランク人のこと。ベリサリオスがシチリアを占領した際、東ゴート王テオダハドは中立と引きかえに、ガリアと北イタリアの大半をフランク人に明け渡した。537年にはウィティギスがこの協定を確認している (『戦史』5. 13. 14-29、7. 33. 2-6)。
- (394) ゲピド人 (ギリシャ語ではギペデス *Γήπαιδες*) は4世紀頃にドナウ北方に定住したゴート人の一派で、元の居住地はスカンディナヴィアであったとも言われる。ヨルダネス『ゴート史』17. 94-95にその由来が見える。彼らについては『戦史』7. 33-35、8. 25-27も参照。
- (395) ここではアドリア海のこと。

- (396) 彼らの活動については本書 11. 11、23. 6-9、24. 12、また『戦史』 2. 10. 23、2. 19. 12 を参照。
- (397) アリストファネス『アカルナイの人々』 704 を参照。
- (398) アラムンダロス (r. 505?-554) が治めるラフム朝や、アレタスが支配するガッサーン朝のもとにいる部族を指している。本書 2. 23 や『戦史』 1. 17. 40-48 を参照。
- (399) 540 年、541 年 (ラジキ人。本書 2. 26-37)、542 年 (本書 3. 30) に続くペルシャ人の侵入。『戦史』 2. 26. 1 にも同様の記述がある。
- (400) デューイングらは「αὐτοῖς」を「コルクス人」ないし「コルクスの人々」と訳しているが、文脈的に「ペルシャ人」と取るべきであろう。本書 2. 26 を参照。ラジキは 541 年にペルシャ軍の攻撃を受け、547/548 年まで占領されていた。
- (401) 本書 11. 12 を参照。ホスローの性格描写については『戦史』 2. 9. 8-12 を、その修辭的含意については Kaldellis, *op.cit.*, 2004, pp. 119-128 を参照。
- (402) この節の表現についてはアリストファネス『雲』 225-228 を参照 (本書 13. 11、20. 22 も見よ)。神学議論はユスティニアヌスも好んだものとされるが (たとえば『戦史』 7. 32. 9)、プロコピオスは『戦史』 5. 3. 5-9 において、「神の本性について、それが果たしていかなる種のものかと考究するのは絶望的狂気のごときことと私は思う」と述べている。プロコピオスがホスローとユスティニアヌスの両君主に対し、さらには神学的思惟なるものに対し、批判的まなざしを向けていることは明らかである。
- (403) 本節は『スーダ』「ἡξίου」、「ἐξαρτήσας」、「ἀναπεπτοκῶς」、「περιεῖναι」の各項目に引用されている。
- (404) トゥキュディデス『歴史』 1. 1. 2 を参照。
- (405) とりわけ 532 年のニカの乱。
- (406) 本書 11. 14-30 を参照。
- (407) スキルトス川の氾濫とそれによるエデッサの被害について、プロコピオスは『建築物』 2. 7. 1-16 で詳しく述べているが、カルデリスは (Kaldellis, 2010, p. 85 note 192) は、『秘史』の執筆時点では『建築物』の執筆予定がなかったことを根拠に、プロコピオスの当初の意図はこのエピソードを書かれなかった『教会史』に含めることであったと考えている。
- (408) 『戦史』 7. 29. 6-8 (547-8 年の氾濫について) を参照。
- (409) 『建築物』 5. 5. 14-20 の記述 (550 年) を参照。
- (410) 「Φιλομήδην」ではなく、シニェス・コドニェル (J. Signes Codoñer 2000, p. 132) にしたがって「Φιλομήλην」と読む。
- (411) これらの地震は、525 年頃から帝国の東方を中心に断続的に生じ、アンティオキア等の一部都市には壊滅的な被害をもたらした。マララス『年代記』のユスティニアヌスとユスティニアヌスの治世の記述には、帝国の諸都市、諸地域で発生した地震の被害状況と皇帝の対応が多く含まれている。
- (412) 541/542 年にアレクサンドリアで発生し、その後またたく間にローマ帝国全土に広まって膨大な犠牲者を出したとされる疫病 (腺ペスト)、いわゆるユスティニアヌスのペスト。『戦史』 2. 22-23 およびマララス『年代記』 18. 90-93 を参照。
- (413) ユスティニアヌスの治世は実質、ユスティニアヌスが帝国を支配していたとするのがプロコピオスの見立てであることから、この表現はユスティニアヌスの治世 (518-527 年)

を指す。つまり、プロコピオスは、ユスティニアヌスの治世の始まりから『秘史』執筆の 550 年頃まで一貫して、邪悪な神霊の力が帝国内外で猛威を振るっていることを言わんとしている。